

# 四條畷市文化財調査年報

第11号

飯盛城跡



令和6(2024)年3月

四條畷市教育委員会



# 巻頭写真図版 1



1. 飯盛城跡遠景（北西から・平成28年7月撮影）



2. 飯盛城跡全景（西から・平成28年7月撮影）

## 巻頭写真図版 2



1. 飯盛城跡近景（北東から・平成30年2月撮影）



2. 飯盛城跡 出土陶磁器・金属製品・石製品・木製品

# 四條畷市文化財調査年報

第 1 1 号

飯盛城跡



令和6(2024)年3月

四條畷市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、四條畷市文化財調査年報の第11号であり、四條畷市文化財調査報告の第63集である。本書には、令和4・5年度に大阪府立四條畷高等学校と四條畷市教育委員会が協働で実施した、同校所蔵の昭和42年度飯盛城跡発掘調査資料の整理事業を報告する。
2. 昭和42年度飯盛城跡発掘調査については、大阪府立四條畷高等学校地歴考古学部（クラブ）種谷典子、山本和子（以上3年）、大台常雄、大西俊行、永作まりえ、花井正博、藤平栄子、堀 高、山田均、山本雅晴（以上2年）、安保弓子、岩田美奈子、江藤敬直、国広和明、杉林正隆、角谷三枝子、出口和美、中谷佳明、西垣真太郎、野間康三、藤原ひろみ、古川千恵子、八木良蔵（以上1年）が、大東市役所を経由して届出の上、調査を実施した。調査期間等は本文中に記載している。
3. 昭和42年度飯盛城跡発掘調査出土資料の整理作業は、四條畷市教育委員会スポーツ・文化財振興課課長代理兼主任 實盛良彦、大阪府立四條畷高等学校教諭 村松直美、小松千絵の指導のもと、同校生徒 古家百恵、佐藤凜、新羽坪里花、松下美桜（以上76期）、宇治田健祐、佐々井右京、曾根恵、那須大輔、原慈生、三村皐月（以上77期）が実施した。
4. 整理作業の進行・本書の作成・出土遺物の鑑定などにあたっては、以下の方々から御指導・御協力を得た。厚く感謝の意を表したい。  
大阪府教育庁文化財保護課、大東市生涯学習課、坂元直哉氏、大下 隆氏、江藤敬直氏、野間康三氏、田中和弘氏（以上元大阪府立四條畷高等学校地歴考古学部員）、山田凜太郎氏（東北歴史博物館）、村瀬 陸氏（奈良市教育委員会）、野島 稔氏（四條畷市立歴史民俗資料館館長）、佐野喜美氏（前四條畷市立歴史民俗資料館館長）。（順不同）
5. 本書掲載の図面・報告図版作成などは、四條畷市教育委員会スポーツ・文化財振興課課長代理兼主任 實盛良彦、副主幹 村上 始、事務職員 田中香里が、会計年度任用職員 田伏美智代の協力を得て行った。
6. 本書は、實盛・村上・田中が分担して執筆・編集を行った。文責者は各文末に記載している。また、第5・6章に、大阪府立四條畷高等学校生徒執筆の探求論文2本を、考察として掲載した。巻末に、昭和43年11月にガリ版刷りで作成された昭和42年度飯盛城跡発掘調査の当初の調査報告と、昭和44年10月刊行の大阪府立四條畷高等学校地歴考古学部誌『古流』第4号に掲載された報文を縮小のうえ転載した。
7. 発掘調査の出土遺物および記録した写真・図面等は大阪府立四條畷高等学校が保管している。出土遺物実測図・遺物写真については四條畷市教育委員会が保管している。
8. 報告図面の表示方位は、磁北である。

# 本文目次

巻頭写真図版	
例言・凡例	
目次	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	6
第1節 遺跡の位置	
第2節 周辺の歴史的環境	
第2章 調査の経過	10
第1節 既往の調査	
第2節 昭和42年度飯盛城跡発掘調査の経過	
第3節 令和4・5年度遺物整理事業の経過	
第3章 昭和42年度飯盛城跡発掘調査の成果	14
第1節 トレンチの配置と層序	
第2節 遺物出土の状況とその一覧	
第3節 出土遺物	
第4節 その他の採集遺物	
第4章 大阪府立四條畷高等学校昭和42年度飯盛城跡発掘調査の意義	29
第1節 四條畷高等学校地歴考古学クラブの歴史	
第2節 クラブによる飯盛城跡調査	
第3節 クラブによる調査の意義	
第5章 出土遺物からみた飯盛城跡の曲輪機能	32
第6章 三好長慶による飯盛城における家臣統制	36
出土遺物観察表	41
参考文献	45
付編1 『飯盛城東の丸一の曲輪調査報告』(昭和43年11月)	47
付編2 「飯盛城址の研究―飯盛城東ノ丸一ノ曲輪調査報告―」 (『古流』第4号所収、昭和44年10月)	64
写真図版	
報告書抄録	

## 挿 図 目 次

第 1 図	周辺遺跡分布図	7
第 2 図	調査地区位置図	11
第 3 図	昭和 42 年 5 月調査地区トレンチ平面図・断面図	15
第 4 図	曲輪 31 (「東の丸一の曲輪」) 昭和 42 年 12 月調査地区トレンチ配置図	16
第 5 図	第 1・2 層遺物出土位置図	17
第 6 図	第 3～5 層遺物出土位置図	18
第 7 図	出土遺物 (昭和 42 年 12 月①)	23
第 8 図	出土遺物 (昭和 42 年 12 月②)	24
第 9 図	出土遺物 (昭和 42 年 12 月③)	25
第 10 図	出土遺物 (採集)	26
第 11 図	出土遺物 (瓦・埴)	27
第 12 図	出土遺物 (「庚御机神社」)	28

## 挿 表 目 次

第 1 表	出土遺物一覧表	19～21
第 2 表	大阪府立四條畷高等学校地歴考古学クラブ年表	30



## 写真図版目次

- 巻頭写真図版1 1. 飯盛城跡遠景（北西から・平成28年7月撮影）  
2. 飯盛城跡全景（西から・平成28年7月撮影）
- 巻頭写真図版2 1. 飯盛城跡近景（北東から・平成30年2月撮影）  
2. 飯盛城跡 出土陶磁器・金属製品・石製品・木製品
- 写真図版1 1. 飯盛城跡遠景（西から・昭和40年9月25日）  
2. 飯盛城跡V・VI郭（西から・昭和45年3月）
- 写真図版2 1. IV郭より「北条口」を望む（北から・昭和45年3月）
- 写真図版3 1. V郭よりVI郭を望む（南から・昭和45年3月）
- 写真図版4 1. VI郭を下から望む（北から・昭和45年3月）  
2. 石垣41・42（南東から・昭和40年代）
- 写真図版5 1. 曲輪31調査地区全景（西から・昭和42年12月）  
2. 曲輪31調査地区近景（西から・昭和42年12月）
- 写真図版6 1. 曲輪31Aトレンチ近景（西から・昭和42年12月）  
2. 曲輪31Aトレンチ調査状況（南から・昭和42年12月）
- 写真図版7 1. 曲輪31Aトレンチ調査状況（西から・昭和42年12月）  
2. 曲輪31Aトレンチ遺物出土位置記録状況（南西から・昭和42年12月）
- 写真図版8 1. 曲輪31遺物出土状況（昭和42年12月）  
2. 曲輪31平板測量状況（昭和42年12月）
- 写真図版9 1. 曲輪31Aトレンチ調査状況スケッチ（八木良蔵画・昭和42年12月）  
2. 曲輪31精査状況スケッチ（八木良蔵画・昭和42年12月）
- 写真図版10 1. 昭和42年12月 出土遺物（曲輪31・土師器皿）  
2. 昭和42年12月 出土遺物（曲輪31・土師器）
- 写真図版11 1. 昭和42年12月 出土遺物（曲輪31・瓦質土器）  
2. 昭和42年12月 出土遺物（曲輪31・金属製品・貝類）
- 写真図版12 1. 昭和42年5月 採集遺物（曲輪31）  
2. 採集遺物（曲輪59・出土曲輪不明）
- 写真図版13 1. 採集遺物（丸瓦・表）  
2. 採集遺物（丸瓦・裏）
- 写真図版14 1. 採集遺物（埴・表）  
2. 採集遺物（埴・裏）
- 写真図版15 1. 採集遺物（埴・表）  
2. 採集遺物（埴・裏）
- 写真図版16 1. 「鹿御机神社」採集遺物（瓦・表）  
2. 「鹿御机神社」採集遺物（瓦・裏）

## 第1章 遺跡の位置と歴史的環境

### 第1節 遺跡の位置

四條畷市は、大阪府の北東部に位置する。市のほぼ中央部に、生駒山に続く飯盛山系がそびえ、市を東の田原盆地と西の平野地区に分けている。飯盛山系から西に向かって、讃良川・岡部川・清滝川・権現川が流れている。生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は京都府八幡丘陵から南は四條畷市南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵・段丘があり、北から枚方市船橋川・穂谷川、交野市天野川、寝屋川市寝屋川、四條畷市讃良川・清滝川などの中小河川によって開かれている。飯盛城跡は、飯盛山系の山頂部に位置する遺跡である。

### 第2節 周辺の歴史的環境

飯盛城跡の周辺の遺跡では、旧石器時代からの各時代の遺構・遺物が見つまっている(第1図)。

**旧石器時代** 讃良川床遺跡では旧石器時代の掘斧・ナイフ形石器・細石刃・削器・彫器などが出土している(櫻井1972)。また、忍岡古墳付近では、縦長剥片を用いたナイフ形石器が採集されている(片山1967a)。岡山南遺跡では、後期旧石器時代後半の木葉形尖頭器が出土している(野島・藤原・花田1976)。

**縄文時代** 縄文時代草創期の有茎尖頭器が南山下遺跡(野島1978b)、四條畷小学校内遺跡(野島1994c)、木間池北方遺跡(村上1997a)などでみつまっている。讃良郡条里遺跡の第二京道路調査地では縄文草創期末からの各時期の遺物が出土しており、石器製作跡も検出されている(井上ほか編2003、佐伯ほか編2007、井上編2008等)。南山下遺跡では中期の集落跡が検出されている(野島1978b、1988)。

砂遺跡では中期から晩期の集落跡が見つまっている(宮野1992、四條畷市教育委員会編2008)。集落内にはイノシシ等動物の足跡が残されていた。晩期では土偶等も出土している。

後期・晩期の遺跡として更良岡山遺跡がある。寝屋川市の讃良川遺跡に東接しており集落の中心が移動したものとみられ、北陸からの大型彫刻石棒・ヒスイ製祭具をはじめ、土偶などの祭祀用品、土器類や多量の石器類が出土した。また晩期の土墳墓が複数確認されている(片山1967b、櫻井1972、宮野1992、野島編2000)。

**弥生時代** 弥生前期初頭の土器が縄文晩期の突帯文土器とともに讃良郡条里遺跡の2005年の調査でみつまっている(中尾ほか編2009)。ここでは炭化米も出土しており、北河内地域における稲作の初現を示す遺物として重要である。讃良郡条里遺跡ではこれら以外にも前期から後期までの水田・微高地上の集落が検出されている(後川・實盛・井上編2015)。

雁屋遺跡は弥生前期から後期にわたって続く拠点集落である。前期では板付Ⅱ式併行期に属する大形壺の出土や(野島1984a)、集落の検出がある(村上2001f)。中期では初頭から後葉までの方形周溝墓群が各調査で検出され、保存状態の良いコウヤマキ・ヒノキ・カヤ製の木棺のほか、朱塗り土器・蓋付木製四脚容器やタンカ状木製品、鳥形木製品などが出土している(辻本1987、野島1987a、野島1994a、阿部1999)。焼失竪穴建物や掘立柱建物、貯木施設も検出され、分銅形土製品やト骨、銅鐸の舌や播磨地域の土器などが出土している(野島1994a、村上・實盛2011)。また2011年の調査ではサヌカイト埋納土坑を検出している。後期でも、竪穴建物群や方形周溝墓などが検出され(野島1987a、阿部1999)、丹後・近江・出雲・山陰地域系の土器類などを含む多くの遺物が出土している(三好ほか2007)。雁屋遺跡の銅鐸舌と関連するものとして、明治44年に四條畷の「砂山」から入れ子になった銅鐸2口が出土したと伝えられ(梅原1985)、現在関西大学が所蔵している。

鎌田遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓が5基みつまっている(野島1994b)。1号方形周溝墓には墳丘のほぼ中心に埋葬施設が1基あり、コウヤマキの組合式木棺材が残存していた。2号方形周溝墓の周溝からは完形の打製石剣が出土した。



第1図 周辺遺跡分布図

- |          |              |            |             |
|----------|--------------|------------|-------------|
| 1. 飯盛城跡  | 2. 奈良田遺跡     | 3. 南山下遺跡   | 4. 岡山南遺跡    |
| 5. 奈良井遺跡 | 6. 中野遺跡      | 7. 墓ノ堂古墳   | 8. 正法寺跡     |
| 9. 清滝古墳群 | 10. 四條小学校内遺跡 | 11. 大上遺跡   | 12. 木間池北方遺跡 |
| 13. 城遺跡  | 14. 国中神社内遺跡  | 15. 南野米崎遺跡 | 16. 南野遺跡    |
| 17. 近世墓地 | 18. 伝和田賢秀墓   |            |             |

このほか四條畷小学校内遺跡で前期の石敷き遺構が(野島 1994c)、蒔屋北遺跡で中期の集落・方形周溝墓が(岩瀬編 2012)、中野遺跡で中期の方形周溝墓が検出されている(村上・實盛 2018)。

古墳時代 讃良川流域で古墳時代前期中頃に全長約 87m の前方後円墳である忍岡古墳が築造されている(梅原 1937)。主体部は竪穴式石室(石塚)で、碧玉製の石剣・鍬形石・紡錘車、鉄剣、鉄鎌、小札片など副葬品の一部が出土している。

この古墳に伴うとみられる前期の集落は、讃良郡条里遺跡で微高地上の集落が検出されている(井上編 2008、近藤ほか編 2006、佐伯ほか編 2007、後川・實盛・井上編 2015)。また岡山南遺跡でも集落を検出している(村上・實盛 2016)。

中～後期の古墳としては墳長約 70m の前方後円墳である後期初頭の墓ノ堂古墳があり、立会調査で周堤に立てられていた馬・馬銅形人物・武人・大刀・家・蓋などの多彩な埴輪片が出土している(野島 1997c、村上・實盛・古谷 2021)。忍ヶ丘駅前 1 号墳では琴を弾く男性埴輪が出土している(野島 1993a、1997a)。清滝古墳群(野島 1980a)や大上古墳群(村上・實盛編 2017)、更良岡山古墳群(野島 1981)などは中期から後期まで続く馬銅い集団の墓域とみられる。城遺跡内の大上 3 号墳は周溝を含めた全長が約 45m ある帆立貝形古墳で、主体部は削平されていたが周溝と墳丘の一部を検出し、原位置を保つ葺石や円筒埴輪が出土した(村上 2006)。清滝古墳群 2 号墳は、直径 20m の円墳で、周溝に馬が埋葬されていた(野島 1980a)。大上 5 号墳は横穴式石室を主体とし、鎌倉時代に盗掘されていたが、金銅装中空耳環が 1 点出土した(野島 1999、四條畷市教育委員会編 2002)。

J R 忍ヶ丘駅付近では集落から中期の形象埴輪が多く出土している。忍ヶ丘駅前遺跡で人物埴輪・子馬形埴輪・水鳥形埴輪(櫻井・佐野・野島 2006、2010 等)、南山下遺跡で馬形埴輪(野島 1987c、d)、岡山南遺跡で家形埴輪が出土しており(野島 1982)、一緒に左足用の木製下駄も出土している(野島 1979a、1982、瀬川 1992)。

古墳時代における四條畷の大きな特徴は、中期に馬の飼育が始まったことである。古墳時代中期以降この地域では全域で渡来系の人々が多く居住していたとみられ、広範に馬飼も行われており、奈良田遺跡(野島 1980c、野島・村上 2000)、中野遺跡・四條畷小学校内遺跡(村上 2000 等)、城遺跡・大上遺跡(村上 2006)、南野米崎遺跡(野島 1985、1987e、1991、四條畷市教育委員会編 2004)などの集落遺跡で馬骨・馬歯をはじめ陶質土器、初期須恵器や韓系土器等が数多く出土している。讃良郡条里遺跡で 5 世紀初頭の馬骨の出土がみられ(中尾ほか編 2009)、蒔屋北遺跡では馬具の鍔・ハミ・鞍や、井戸枠に再利用された準槽造船、埋葬馬が完全な姿で出土しており、河内湖岸の集落とみられる(岩瀬ほか編 2010、岩瀬編 2012)。鎌田遺跡では溝からスリザサラや木鏃、祭具を載せる台等の祭祀遺物が出土し(村上 2001c、d、e)、奈良井遺跡では方形周溝状の祭祀施設遺構を検出し、犠牲馬の首や人形・馬形土製品等が出土している(野島 1980b、野島・村上 2000、野島・村上・實盛 2012)。これらの人々を支えた生産遺跡として、鎌田遺跡や讃良郡条里遺跡では水田跡がみつまっている(野島 1993b、中尾ほか編 2009 等)。讃良郡条里遺跡の 2011 年度の調査では水路の堤防構築に敷葉を使った工法が用いられていた(後川・實盛・井上編 2015)。北口遺跡では緑色凝灰岩質の石核が出土し、中期に玉類の製作が行われたとみられる(村上・實盛 2014)。

古代 正法寺跡は、7 世紀に創建された寺院跡で、これまでの調査で中門、塔、講堂などの存在が確認されており、平安時代ごろの建物はいずれも石積み、あるいは瓦積みの基壇建物である(大阪府教育委員会編 1970)。一方、創建当時の建物の多くは掘立柱建物であった(村上 2001a)。ただし、中門は礎石建物で(野島・藤原・花田 1977)、塔は石積みの遺構を伴っていた(大阪府教育委員会編 1970)。また回廊の南西部分にあたと推定される位置の瓦だまりから創建時の鴟尾片が出土している(野島・村上 2002)。

讃良寺跡は 1969 年に部分的に調査され、暗渠の可能性のある瓦敷きなどを検出し、7 世紀の創建であることが分かった(桜井 1972、櫻井・佐野・野島 2006、2010)。1997 年の調査では正法寺跡のものと同範の素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土しており(野島編 2000)、文様に型起因の摩耗がみられることから、讃良寺のものが後に作られたと考えられている(野島 1997b)。

飛鳥～奈良時代には寺跡の近辺を中心に集落跡がみつまっている。正法寺近辺では河川跡の数箇所です馬を使った祭祀がおこなわれており、木間池北方遺跡で円面硯や土器と共に土馬が 7 体出土した

(村上2006)。木間池北方遺跡で「□万呂」(村上2006)、南野遺跡では「大」の字を墨書した土器が出土している(野島1995)。讃良郡条里遺跡では小型海獣葡萄鏡が出土しており、有力者が祭祀に用いたとみられる(後川・實盛・井上編2015)。また、讃良郡条里遺跡では奈良時代に遡る条里制地割が検出されており、初期の条里制地割施行例として注目される(中尾・山根編2009)。

平安時代には中野遺跡や、岡山南遺跡、讃良郡条里遺跡のほか、四條畷小学校内遺跡(村上2000)、木間池北方遺跡(村上2006)、葎屋北遺跡(岩瀬ほか編2010)などで集落が検出されている。中野遺跡では「日置」と墨書された土師器杯や(村上2006)、「應保二年如月廿日」と書かれた墨書曲物井戸杵が出土している(村上2003、村上・實盛2019)。岡山南遺跡では掘立柱建物群が検出されており(野島・藤原・花田1976、野島1987b)、井戸からは「高田宅」「福万宅」などの墨書土器が出土している(野島1987a)。讃良郡条里遺跡では皇朝十二銭を用いた溝内祭祀跡を検出している(後川・實盛・井上編2015)。

大阪から奈良へと向かう街道のひとつである清滝街道を、飯盛山系の西麓まで下りきらない地点には、延喜式神名帳に記載される式内社の国中神社が鎮座している。四條畷市内には、他に御机神社と忍陵神社が式内社としてあげられるが、延喜式の時代から場所を変えずに残っている神社はこの国中神社だけである。

中世以降 鎌倉時代から室町時代にかけては、奈良井遺跡(村上2003a)、南山下遺跡(野島・村上2001、村上2001b)、岡山南遺跡(野島・藤原・花田1976、野島1982、野島・前田1984、野島1987b、村上2004、村上・實盛2013a)、中野遺跡(野島1977、1986b、西尾1987)、忍ヶ丘駅前遺跡(野島1983、村上1997b)、四條畷小学校内遺跡(村上2000)、大上遺跡(村上2006)木間池北方遺跡(村上1997a)、南野遺跡(野島1995)、葎屋北遺跡(岩瀬ほか編2010)、讃良郡条里遺跡(後川・實盛・井上編2015)、南野米崎遺跡、楠公遺跡、葎屋遺跡等で集落跡等がみついている。坪井遺跡では鎌倉時代の鍛冶工場の跡とそれに伴う土壇墓がみつかっており(野島1996a、b)、工房跡では鍛冶炉・金床石、井戸などの施設が検出されている。

南北朝時代に四條畷付近では、四條畷の合戦が行われたとされている。南朝方の実質的大将で若くして戦死した楠正行のもと、その一族の和田賢秀のもとと伝わる墓があり、いずれも大阪府指定の史跡となっている。

戦国時代には、三好長慶が飯盛城を拠点に畿内・四国の一部を支配し室町幕府の実権を握った。遺跡としての飯盛城跡は大東市教育委員会によって調査が行われ(黒田1989)、平成23年度には城跡の詳細な縄張り図を測量・作成した(村上・實盛編2013、黒田2013、大東市教育委員会・四條畷市教育委員会2013)。その後四條畷、大東両市により城跡の総合調査に着手し、石垣、瓦、礎石建物という織豊系城郭の要素を先駆的に導入した画期となる戦国城郭であることが判明した(李編2020)。

室町時代後期の16世紀中頃に讃良郡条里遺跡内の大将軍社が創建され、明治44年に式内社の忍陵神社に合祀されるまで地域の尊崇を集めた。発掘調査では御正鉢あるいは奉納されたとみられる柴垣柳樹双鳥鏡が出土したほか、近世から近代に属する大量の灯明皿が出土し、文献に記録されていた「百灯明」の祭りの存在が裏付けられている(後川・實盛・井上編2015)。

(實盛良彦)

## 第2章 調査の経過

### 第1節 既往の調査

史跡飯盛城跡は、大阪府四條畷市と大東市にまたがり、行政区画では北側が四條畷市大字南野、南側が大東市大字北条に所在する戦国時代末期の山城跡である。この城は、城主であった三好義継が若江城へ移る永禄12年ごろまで城郭としての機能があったと考えられている（李編2020）。

江戸期になると、周辺村落で作成された絵図に城跡の石垣が描かれ、古城跡として認識されていたことがわかる。明治期から昭和初期に至っても、山中にある石垣から、そこが城跡であるという認識は継続していたと考えられる（李編2020）。

昭和5年、飯盛山上に遊園地を作る計画が進行したことを受け、平尾兵吾を含む大阪府の史蹟調査会委員が踏査を行った。この際の写真は現在、大阪府が所蔵しており、当時の城郭の姿を伝える貴重な資料となっている。昭和6年には平尾兵吾が北河内地域の史蹟についてまとめた『北河内郡史蹟史話』内に飯盛城跡が取り上げられており、現在でも使用されている「千疊敷」や「本丸」、「ゴタイ塚」などの名称が掲載された。加えて、礎石の配置が整っていることや「甕、壺、瓦片、土器、刀剣、金具の残片」、「石製の米搗臼」などが出土し、被熱を受けていることから、落城し焼亡した可能性を指摘した（平尾1931）。

昭和42年5月3日、12月16～22日に四條畷高校考古学クラブが東の丸1の曲輪（曲輪31）の発掘調査を行った。この時の調査については後述する。

平成23年度には四條畷市、大東市の両教育委員会でGPSを用いて、城跡の詳細な縄張図を測量・作成した（村上・實盛編2013、黒田2013、大東市教育委員会・四條畷市教育委員会2013）。発掘調査は、平成元年に大東市教育委員会がFM802の飯盛山送信所建設に伴いⅦ郭（曲輪84）で行い、土塁や櫓の跡を検出した（黒田1989、2016）。遺構を発掘調査により検出したのはこれが初めてであった。

平成28年度から3カ年に渡り国史跡指定をめざした総合調査を四條畷市・大東市両教育委員会でを行った。平成28年度には三次元航空レーザ計測を行い、詳細な地形測量図・赤色立体地図・遺構現況図などを作成した。これらの資料を基に、飯盛城跡の城域と遺構の遺存状態を確認するための分布調査を行った。その結果、城郭を構成する遺構は山頂を中心に東西400m、南北700mの範囲に分布していることが明らかになり、北エリアの曲輪は狭く主尾根から派生する支尾根に曲輪群が築かれているのに対し、南エリアは広大な面積の曲輪で構成され、支尾根に曲輪群が築かれていないことが明らかになった。また、平成28～30年度には四條畷市でⅤ郭（御体塚郭）曲輪59、大東市でⅧ郭（千疊敷郭）曲輪89・90・99・112及びⅨ郭（南丸）曲輪95・96・97の発掘調査を行った。Ⅴ郭では埴列建物が検出され、出土遺物からその上の構造物は土壁で、瓦の出土量から棟のみに瓦を葺いた建物を推定した。Ⅷ郭・Ⅸ郭では曲輪を造成する盛土を検出し、その工事の様子を復元した。また、Ⅸ郭では礎石と土壁を検出していることから、土壁の建物があつたと推定した（李編2020）。（田中香里）

### 第2節 昭和42年度飯盛城跡発掘調査の経過

#### 1. 調査の経過

昭和42年度の飯盛城跡発掘調査については、現四條畷市大字南野1973・1974・1978（当時は四條畷町域。報文では「大東市北条2377番地と、四條畷町南野の境界にあり、やや四條畷町より」とされる）の飯盛城跡「東の丸一の曲輪（曲輪31）」において大阪府立四條畷高等学校地歴考古学部により範囲確認調査が計画された。調査計画は、同部で昭和42年5月3日におこなった事前調査の成果に基づき、高校教員や大学研究者等の指導を受けることなく部員のみで独自に立案されたものであった。飯盛山の山頂が大東市域に属していることから、同部では「大東市役所」に「届出」（文化財保護法第57条（当時）に基づく文化財保護委員会への届出とみられる）を提出した。報文によれば、調査の少し前に「許可」がおりたという。



第2図 調査地区位置図(座標は世界測地系)

調査は人力で掘削され、層序は5cmごとに人為的に分層する人工層序決定法により層位を分けて遺物の取上げがおこなわれた。調査地区は平板測量により曲輪形状およびトレンチ配置の測量がおこなわれた。調査期間は昭和42年12月16日～22日で、調査面積は約58㎡であった。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計2箱であった。

調査の報告については、調査後に整理作業がおこなわれ、参加者の岩田美奈子、江藤敬直、出口和美、藤原ひろみにより昭和43年11月30日にガリ版刷りの報告書が刊行され(本書47頁に再録)、昭和44年10月1日刊行の部誌『古流』第四号に報文が掲載された(本書64頁に再録)。(實盛)

## 2. 調査日誌

昭和42年5月3日(水・祝)

新入生案内に伴い飯盛城跡の調査をおこなう(事前調査)。

天候：快晴

参加者：大西俊行、永作まりえ、花井正博、藤平栄子、山田均、山本雅雄(以上2年)、江藤敬直、

国広和明、杉林正隆、出口和美、中谷佳明、野間康三、古川千恵子(以上1年)

調査区域：東ノ丸および北ノ丸(御体塚横)

備考：東ノ丸で瓦片、土器片少数(第10図-60~70)、および銅器1点出土(第10図-71)。

北ノ丸(御体塚横)で土器片少数、鉄器、瓦小片出土(第10図-73~76)。

昭和42年11月25日(土)

事前調査成果に基づき東ノ丸の発掘調査を実施するため、調査前草刈りと測量・調査地区トレンチ設定(水糸張り)をおこなう。

昭和42年12月16日(土)

天候：曇 調査時間：12:00~16:00

参加者：大台常雄、大西、永作、花井、藤平、山本(2年)、安保弓子、岩田美奈子、江藤、国広、

杉林、角谷三枝子、出口、中谷、野間、藤原ひろみ、古川、八木良蔵(1年)

発掘区域・層位：Aトレンチ第1層

備考：元、東ノ丸は耕作地であったと妙法寺住職より聞く。西ノ丸踏査に出た者、石垣2基確認。

昭和42年12月17日(日)

天候：曇 調査時間：10:00~15:30

参加者：種谷典子、山本和子(3年)、大西、花井(2年)、安保、岩田、出口、野間、古川(1年)

発掘区域・層位：Aトレンチ第1・2層、Bトレンチ第1層

昭和42年12月18日(月)

天候：曇 調査時間：12:30~15:30

参加者：大西、花井、堀高、山田、山本(2年)、岩田、江藤、国広、杉林、西垣真太郎、野間(1年)

発掘区域・層位：Aトレンチ第2層

昭和42年12月19日(火)

天候：雨 雨天のため調査休止

昭和42年12月20日(水)

天候：晴 調査時間：11:00~16:00

参加者：大台、大西、花井、藤平、山本(2年)、国広和明、杉林正隆、西垣、野間、八木(1年)

発掘区域・層位：Aトレンチ(22~49区)第3~5層

備考：Aトレンチ1~21区及びBトレンチの調査を中止し、Aトレンチ22~49区のみ第3層以下の調査を行うと決定。Aトレンチ(22~49区)第3層から円形の鉄製品出土(第9図-56・57か)。

昭和42年12月21日(木)

天候：晴 調査時間：10:30~15:30

参加者：大台、大西、花井、藤平(2年)、安保、岩田、江藤、国広、杉林、角谷、出口、中谷、野間、

藤原(1年)

発掘区域・層位：Aトレンチ(22~49区)第2~5層



備考：御体塚付近で石垣確認。南北石垣幅 11.25m、高さ 2.60m。東西石垣幅 9.45m、高さ 3.00m。  
下方にも石垣がある模様。

昭和 42 年 12 月 22 日（金）

天候：晴 調査時間：10：30～16：00

参加者：大西、永作、花井、藤平、山本（2 年）、岩田、江藤、国広、杉林、出口、西垣、野間、藤原、古川（1 年）

発掘区域・層位：A トレンチ（22～49 区）第 2～5 層

備考：花崗岩風化物混入土より 1 点出土（深さ 0.35m）。銅製の円筒物破片（第 9 図-59）出土。  
（實盛）

### 第 3 節 令和 4・5 年度遺物整理事業の経過

四條畷市は大東市とともに飯盛城跡の総合調査を平成 28 年度から令和元年度にかけておこない、その啓発事業として令和元年（2019）7 月 20 日（土）に飯盛城跡調査報告会「クローズアップ飯盛城 2019」を、四條畷市市民総合センター市民ホールを会場に開催した。その終了後に四條畷市教育委員会へ、来場していた大阪府立四條畷高等学校教諭から、同校の地歴公民教室に過去の発掘調査資料が保管されているとの連絡があった。四條畷市教育委員会では 7 月 22 日に現地確認をおこなった結果、過去に存在していた同校地歴考古学部の関係資料で、多数の遺物や調査写真、日誌、調査報告書、部誌が保管されていることを確認した。その中に飯盛城跡を昭和 42 年に発掘調査した資料が含まれていることが分かったため、関係資料について、同年 7 月 23 日付職教生第 462 号「飯盛城跡総合調査に伴う資料の借用について（依頼）」で同年 7 月 29 日から令和 2 年 3 月 31 日まで借用を行い、内容把握をおこなった。その内容は『飯盛城跡総合調査報告書』（2020）に掲載したが、遺物の詳細な整理はおこなえず、当時の部誌等に基づいた把握にとどまっていた。

大阪府立四條畷高等学校では、平成 24 年度から文部科学省より SSH（Super Science High school）の指定を受け、令和 5 年度からは「社会に貢献できる科学技術系人材を育成する教育システムの深化と、地域への成果普及」を研究テーマとしている。生徒は 3 年間の探究活動（探究チャレンジ）を実践しており、2 年時の「課題研究」として、飯盛城跡出土遺物を研究対象としたいという声が生徒から上がった。これを受けて、大阪府立四條畷高等学校から四條畷市教育委員会へ、令和 4 年 3 月 3 日付四高第 277 号で、「令和 3 年度に国史跡に指定された飯盛城跡において、過去に本校地歴部による発掘調査で出土した貴重な資料について、その散逸を防ぎ良好な状態で保管していくために、貴市教育委員会職員指導のもと考古学的手法による再整理を行うことにより、生徒たちに飯盛城跡の歴史遺産としての重要性を理解させる」ことを目的とした講師派遣の依頼があった。令和 4 年 3 月 7 日付職教生第 1680 号で回答をおこない、同年 4 月 8 日から令和 5 年 2 月 24 日まで、全 26 回の講師派遣をおこなった。作業は出土遺物の全容把握および台帳作成を完了し、遺物洗浄および注記を進めた。

令和 5 年度についても、2 年時の「課題研究」として、飯盛城跡出土遺物を研究対象としたいという生徒があり、大阪府立四條畷高等学校から四條畷市教育委員会へ、令和 5 年 3 月 29 日付四高第 306 号で講師派遣の依頼があり、令和 5 年 3 月 31 日付職教生文第 1931 号で回答をおこない、令和 5 年 4 月 3 日～令和 6 年 3 月 29 日までの期間で、全 27 回の講師派遣をおこなった。作業は出土遺物の洗浄および注記、接合を完了し、文献を用いた研究も併行しておこなった。

調査の外部に向けた成果発表については、令和 4 年度は 7 月 23 日にクローズアップ飯盛城 2022、11 月 23 日にジャパンチャレンジアワード in 四條畷、令和 5 年 1 月 28 日に北河内地区探究活動成果発表会・交流会（北河内サイエンスデイ）でそれぞれ生徒たちによる発表をおこなった。令和 5 年度は奈良大学が主催の全国高校生歴史フォーラムに応募し、11 月 11 日の大阪府立四條畷高等学校創立 120 周年記念式典、12 月 16 日の中・高生探究の集い 2023 コンテスト部門、令和 6 年 2 月 3 日の北河内地区探究活動成果発表会・交流会（北河内サイエンスデイ）、3 月 18 日から 31 日にかけての IBL ユースカンファレンスで生徒たちによる発表をおこない、成果の公表があった。北河内地区探究活動成果発表会・交流会では優秀研究として銅賞を獲得した。  
（實盛）

### 第3章 昭和42年度飯盛城跡発掘調査の成果

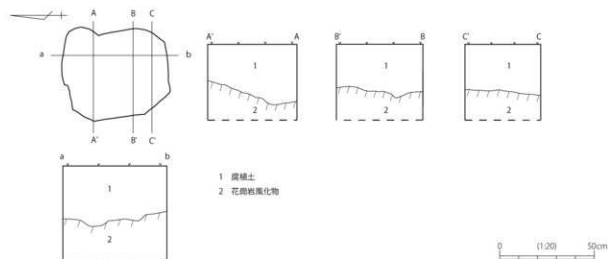
#### 第1節 トレンチの配置と層序

発掘調査地区の調査前は、畑地に利用された時期があったようで、調査参加者によれば畝のようなものが残っていたという。5月3日に飯盛城跡「東の丸一の曲輪」(曲輪31)と「北の丸(御体塚横)」(曲輪59)で事前調査がおこなわれ、「東の丸一の曲輪」(曲輪31)では一辺50cm程の正方形に近い形状のトレンチが設定され、地山と判断された「花崗岩風化物」まで調査がおこなわれた(第3図)。その結果から、「東の丸一の曲輪」(曲輪31)を調査地に選定し、調査トレンチが設定された。トレンチは曲輪の北西に南北長7m、東西幅3mの南北トレンチ、その北東端から東へ東西長7m、南北幅4mの東西トレンチを組み合わせたL字状の調査地区が設定され、これをA地区とされた。また、曲輪中央南寄りに3×3mの正方形のトレンチが設定され、これをB地区とされた。各調査地区は1mごとの正方形のグリッドが設定され、そこにそれぞれの地区で南西から北東へと順にグリッド番号が付された(第4図)。このグリッドと、後述する層序ごとに遺物の取上げがおこなわれたとみられるが、1点ずつの出土位置は一部の記録が現時点で行方不明であり復元困難であった。

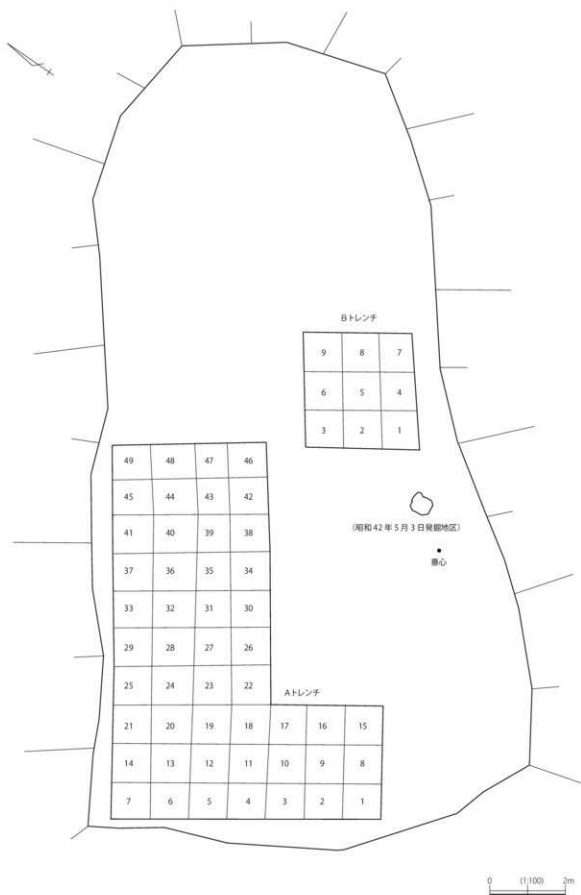
層序は5cmごとに人為的に分層する人工層序決定法により層位を分けて遺物の取上げがおこなわれた。このため、第1層は表土～5cm、第2層は-5～-10cm、第3層は-10～-15cm、第4層は-15～-20cm、第5層は-20～-25cmである。A地区については、グリッド1～17までは第1層のみ、グリッド18～21までは第1・2層、グリッド22～33までは第1～4層、グリッド34～49までは第1～5層の調査がおこなわれた。B地区については、第1層および一部第2層の調査がおこなわれた。これらの土層は地下25cmまでは「腐植土」の堆積であったと記録されている。A地区で調査された第5層において地下25cmで「花崗岩風化物」を確認しており、そこから土器片が1点出土したという。このことを報告では課題点として挙げているが、この「花崗岩風化物」もⅧ郭の調査でみられたような(李編 2020)、曲輪造成時の盛土であった可能性がある。

また、遺構等は確認されておらず、「礎石も焼土も発見されなかった」と記録されている。この点については、地山もしくは遺構面の可能性がある「花崗岩風化物」を確認したのがごく一部(グリッド34～49のみ)とみられることから、調査地区内のほとんどにおいて遺構面到達前に調査中止している可能性があることに起因するとみられる。

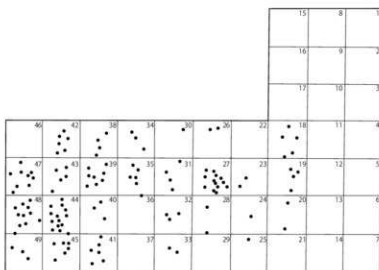
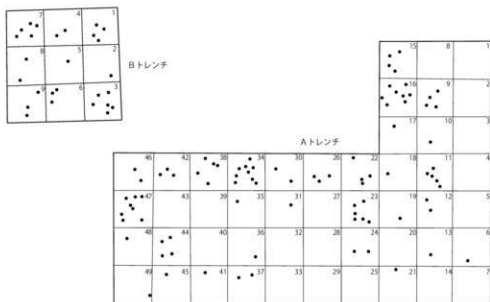
(實盛)



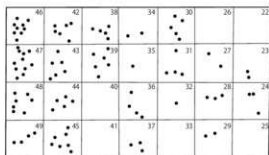
第3図 昭和42年5月調査地区トレンチ平面図・断面図



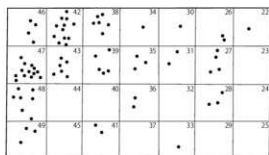
第4図 曲輪31(「東の丸一の曲輪」)昭和42年12月調査地区トレンチ配置図



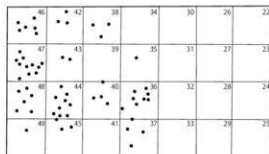
第5図 第1・2層遺物出土位置図



Aトレンチ22～49 第3層



Aトレンチ22～49 第4層



Aトレンチ22～49 第5層



第6図 第3～5層遺物出土位置図

## 第2節 遺物出土の状況とその一覧

### 【遺物出土の状況】

調査で出土した遺物については、先述のとおり5cmごとに分層した層序と、1×1mで設定したグリッドごとに取り上げがおこなわれた(第5・6図)。遺物には1点ずつ遺物番号が付されて新聞紙にくるまれ、出土日と出土層位、地区ごとに袋を分けて保管され、一部には出土日のラベルが付されていた。当初のガリ版刷りの報告書には、出土位置が細かく記録されており、平板測量により1点ずつ位置を記録していたか、もしくはグリッド配置の平板測量図を作成し、取り上げ時はグリッド内での出土位置を図面上に記録した可能性がある。その記録を確認すると、調査の進行状況についても日誌と併せて追うことが可能である。

すなわち、12月16日にA地区から調査を開始し、17日にB地区の調査もおこなうとともにA地区は第2層の掘削を開始した。18日にはA地区第2層の調査を続けるが、19日の雨を挟み20日にA・B両地区の調査継続に着手するに際し、A地区グリッド22～49の調査を優先することとし、21、22日はA地区グリッド22～49のみの調査を継続し、特にグリッド34～49については第5層までの調査をおこなったものとみられる。

以下、記録から判明する日付別の出土資料を遺物番号順に述べ、一覧を示しておく(第1表)。

### 【日付別出土資料】

#### 昭和42年5月3日(水・祝)

東ノ丸：瓦片、土器片少数(第10図-60～70)、および銅器1点出土(第10図-71)

北ノ丸(御体塚横)：土器片少数、鉄器、瓦小片出土(第10図-73～76)

#### 昭和42年12月16日(土)

Aトレンチ第1層：1-A 1～58

#### 昭和42年12月17日(日)

Aトレンチ第1層：1-A 59～82

Aトレンチ第2層：2-A 1～10

Bトレンチ第1層：1-B 1～26

#### 昭和42年12月18日(月)

Aトレンチ第2層：2-A 11～72

#### 昭和42年12月20日(水)

Bトレンチ第1層：1-B 27～28

Aトレンチ第2層：2-A 122

Aトレンチ第3層：3-A 1～59+番外

Aトレンチ第4層：4-A 1～58

Aトレンチ第5層：5-A 1～7

#### 昭和42年12月21日(木)

Aトレンチ第2層：2-A 73～115

Aトレンチ第3層：3-A 60～

Aトレンチ第4層：4-A 59～81

Aトレンチ第5層：5-A 8～47

#### 昭和42年12月22日(金)

Aトレンチ第2層：2-A 116～121、123

Aトレンチ第3層：3-A ～84

Aトレンチ第4層：4-A 銅製品

Aトレンチ第5層：5-A 48～

#### 日付不明

Aトレンチ第1層：1-A 83～84

(實盛)

第1表 出土遺物一覽表

地区記号	遺物番号	日付	層位	遺物種類	備考	地区記号	遺物番号	日付	層位	遺物種類	備考
1A	001	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	001	1967/2/17	50c ~ 100a	土師器	
1A	002	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋	第 1 圖-9	2A	002	1967/2/17	50c ~ 100a	土師器蓋	
1A	003	1967/2/16		文書		2A	003	1967/2/17	50c ~ 100a	土師器蓋	
1A	004	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋	第 1 圖-19	2A	004	1967/2/17	50c ~ 100a	土師器蓋 灯明蓋	
1A	005	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋	第 1 圖-19	2A	005	1967/2/17	50c ~ 100a	土師器蓋	
1A	006	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋	第 1 圖-42	2A	006	1967/2/17	50c ~ 100a	土師器蓋	
1A	007	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	007	1967/2/17	50c ~ 100a	土師器蓋 灯明蓋	007 と接合、第 7 圖-3
1A	008	1967/2/16	50c ~ 50e	中身斷片		2A	008	1967/2/17	50c ~ 100a	土師器蓋 灯明蓋	007 と接合、第 7 圖-3
1A	009	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋	第 1 圖-23	2A	009	1967/2/17	50c ~ 100a	土師器蓋	
1A	010	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋	第 7 圖-12	2A	010	1967/2/17	50c ~ 100a	土師器蓋	
1A	011	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	011	1967/2/18		文書	
1A	012	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	012	1967/2/18		文書	
1A	013	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	013	1967/2/18		文書	
1A	014	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	014	1967/2/18		文書	
1A	015	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	015	1967/2/18		文書	
1A	016	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋	第 1 圖-27	2A	016	1967/2/18		文書	
1A	017	1967/2/16		文書		2A	017	1967/2/18		文書	
1A	018	1967/2/16		文書		2A	018	1967/2/18		文書	
1A	019	1967/2/16	50c ~ 50e	瓦片	写真図版 11-2-95	2A	019	1967/2/18		文書	
1A	020	1967/2/16		文書		2A	020	1967/2/18		文書	
1A	021	10 月 2 日	50c ~ 50e	土師器蓋	第 1 圖-6	2A	021	1967/2/18		文書	
1A	022	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	022	1967/2/18		文書	
1A	023	1967/2/16		文書		2A	023	1967/2/18		文書	
1A	024	1967/2/16		文書		2A	024	1967/2/18		文書	
1A	026	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋 灯明蓋	第 1 圖-2	2A	026	1967/2/18		文書	
1A	027	1967/2/16		文書		2A	027	1967/2/18		文書	
1A	028	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋 灯明蓋		2A	028	1967/2/18		文書	
1A	029	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器		2A	029	1967/2/18		文書	
1A	030	1967/2/16		文書		2A	030	1967/2/18		文書	
1A	031	1967/2/16		文書		2A	031	1967/2/18		文書	
1A	032	1967/2/16		文書		2A	032	1967/2/18		文書	
1A	033	1967/2/16		文書		2A	033	1967/2/18		文書	
1A	034	1967/2/16		文書		2A	034	1967/2/18		文書	
1A	035	1967/2/16		文書		2A	035	1967/2/18		文書	
1A	036	1967/2/16		文書		2A	036	1967/2/18		文書	
1A	037	1967/2/16		文書		2A	037	1967/2/18		文書	
1A	038	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器		2A	038	1967/2/18	50c ~ 100a	鉄片	
1A	039	1967/2/16		文書		2A	039	1967/2/18		文書	
1A	040	1967/2/16		文書		2A	040	1967/2/18	50c ~ 100a	瓦質土師	
1A	041	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器		2A	041	1967/2/18		文書	
1A	042	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	042	1967/2/18		文書	
1A	043	1967/2/16	50c ~ 50e	中身斷片		2A	043	1967/2/18		文書	
1A	044	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	044	1967/2/18		文書	
1A	045	1967/2/16	50c ~ 50e	瓦片	写真図版 11-2-96	2A	045	1967/2/18		文書	
1A	046	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	046	1967/2/18		文書	
1A	047	1967/2/16		文書		2A	047	1967/2/18		文書	
1A	048	1967/2/16		文書		2A	048	1967/2/18		文書	
1A	049	1967/2/16		文書		2A	049	1967/2/18		文書	
1A	050	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	050	1967/2/18		文書	
1A	051	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	051	1967/2/18		文書	
1A	052	1967/2/16		文書		2A	052	1967/2/18		文書	
1A	053	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	053	1967/2/18		文書	
1A	054	1967/2/16		文書		2A	054	1967/2/18		文書	
1A	055	1967/2/16		文書		2A	055	1967/2/18		文書	
1A	056	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	056	1967/2/18		文書	
1A	057	1967/2/16	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	057	1967/2/18		文書	
1A	058	1967/2/16		文書		2A	058	1967/2/18		文書	
1A	059	1967/2/17	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	059	1967/2/18		文書	
1A	060	1967/2/17	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	060	1967/2/18	50c ~ 100a	埴土	
1A	061	1967/2/17	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	061	1967/2/18		文書	
1A	062	1967/2/17		文書		2A	062	1967/2/18		文書	
1A	063	1967/2/17	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	063	1967/2/18		文書	
1A	064	1967/2/17		文書		2A	064	1967/2/18		文書	
1A	065	1967/2/17	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	065	1967/2/18		文書	
1A	066	1967/2/17		文書		2A	066	1967/2/18		文書	
1A	067	1967/2/17	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	067	1967/2/18		文書	
1A	068	1967/2/17	50c ~ 50e	土師器蓋	第 7 圖-20	2A	068	1967/2/18	50c ~ 100a	土師器	
1A	070	1967/2/17	50c ~ 50e	瓦質土師		2A	070	1967/2/18	50c ~ 100a	土師器	
1A	071	1967/2/17		文書		2A	071	1967/2/18	50c ~ 100a	埴土?	
1A	072	1967/2/17	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	072	1967/2/18		文書	
1A	073	1967/2/17		文書		2A	073	1967/2/18	50c ~ 100a	土師器蓋	
1A	074	1967/2/17		文書		2A	074	1967/2/18	50c ~ 100a	鉄釘	
1A	076	1967/2/17	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	076	1967/2/18	50c ~ 100a	土師器蓋	2A-77 と接合、第 7 圖-4
1A	077	1967/2/17	50c ~ 50e	土師器蓋	第 7 圖-28	2A	077	1967/2/18	50c ~ 100a	土師器蓋	2A-76 と接合、第 7 圖-4
1A	078	1967/2/17	50c ~ 50e	瓦質土師流鉢	第 4 圖-39	2A	078	1967/2/18	50c ~ 100a	土師器蓋	
1A	079	1967/2/17		文書		2A	079	1967/2/18	50c ~ 100a	瓦質土師	
1A	080	1967/2/17	50c ~ 50e	土師器蓋		2A	080	1967/2/18	50c ~ 100a	土師器蓋	
1A	081	1967/2/17	50c ~ 50e	土師器	第 1 圖-40	2A	081	1967/2/18	50c ~ 100a	土師器蓋	
1A	082	1967/2/17	50c ~ 50e	土師器蓋 灯明蓋		2A	082	1967/2/18	50c ~ 100a	土師器蓋	
1A	083	1967/2/20		文書		2A	083	1967/2/18	50c ~ 100a	土師器蓋	
1A	084	1967/2/20	50c ~ 50e	瓦質土師		2A	084	1967/2/18	50c ~ 100a	土師器蓋	

地区記号	遺物番号	日付	層位	遺物種類	備考
2A	082	1967/12/21		文書	
2A	083	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	鉄釘	第 9 図-50
2A	084	1967/12/21		文書	
2A	085	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	土師器蓋	
2A	086	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	鉄釘	
2A	087	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	土師器蓋	
2A	088	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	天目石環	第 8 図-32
2A	089	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	土師器蓋	
2A	090	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	土師器蓋	
2A	091	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	土師器蓋	
2A	092	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	鉄釘	
2A	093	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	土師器蓋	
2A	094	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	鉄釘	
2A	095	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	土師器蓋	
2A	096	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	土師器蓋	
2A	097	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	鉄釘	
2A	098	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	板状鉄製品	第 9 図-55
2A	099	1967/12/21	-5cm ~ -10cm		巾着跡 L
2A	100	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	土師器蓋	
2A	101	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	石?	
2A	102	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	瓦質土器	
2A	103	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	鉄釘	
2A	104	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	土師器	第 7 図-24
2A	105	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	鉄釘	
2A	106	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	鉄釘	
2A	107	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	鉄釘	第 9 図-51
2A	108	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	鉄釘	
2A	109	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	漆塗陶器	第 8 図-33
2A	110	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	古磁皿	第 8 図-31
2A	111	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	土師器蓋	
2A	112	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	土師器蓋	
2A	113	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	鉄釘	
2A	114	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	土師器蓋	
2A	115	1967/12/21	-5cm ~ -10cm	土師器	
2A	116	1967/12/22	-5cm ~ -10cm	土師器蓋	
2A	117	1967/12/22	-5cm ~ -10cm	土師器蓋	
2A	118	1967/12/22	-5cm ~ -10cm	瓦質土器風炉	第 8 図-36
2A	119	1967/12/22	-5cm ~ -10cm	鉄釘	第 9 図-48
2A	120	1967/12/22	-5cm ~ -10cm	土師器	
2A	121	1967/12/22	-5cm ~ -10cm	土師器 蓋	第 8 図-25
2A	122	1967/12/22	-5cm ~ -10cm	土師器蓋	
2A	123	1967/12/22	-5cm ~ -10cm	磁石	第 8 図-45
2A	124	1967/12/22	-5cm ~ -10cm	土師器蓋	

地区記号	遺物番号	日付	層位	遺物種類	備考
3A	001	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	002	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	003	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	004	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	005	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	006	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	007	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器	
3A	008	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	瓦質土器	
3A	009	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	010	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	011	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	瓦質土器	第 8 図-43
3A	012	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	013	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	鉄釘	
3A	014	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	015	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	016	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	017	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	018	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器	
3A	019	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器	
3A	020	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器	
3A	021	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	022	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	023	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器	
3A	024	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器	
3A	025	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器	
3A	026	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器	
3A	027	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	瓦質土器漆鉢	第 8 図-37
3A	028	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	029	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	030	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	031	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	032	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	033	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	磁石	第 8 図-46
3A	034	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	035	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	036	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器	
3A	037	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	瓦質土器	
3A	038	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	039	1967/12/20		文書	
3A	040	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	瓦質土器	第 8 図-44
3A	041	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋 灯明蓋	第 7 図-1
3A	042	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	043	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	044	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	045	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	046	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器	
3A	047	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	048	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器	
3A	049	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	88-041、049 と重複 第 7 図-10
3A	050	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	051	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器	
3A	052	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	鉄釘	
3A	053	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	054	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	鉄釘	第 9 図-54
3A	055	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	鉄釘	第 9 図-53
3A	056	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	057	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器	
3A	058	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器	
3A	059	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	土師器、瓦質土器	
3A	060		-10cm ~ -15cm	土師器	
3A	061			文書	
3A	062		-10cm ~ -15cm	瓦質土器漆鉢	第 8 図-38
3A	063		-10cm ~ -15cm	土師器	
3A	064		-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	065		-10cm ~ -15cm	土師器漆鉢	第 7 図-22
3A	066		-10cm ~ -15cm	土師器	
3A	067			文書	
3A	068		-10cm ~ -15cm	土師器	
3A	069			文書	
3A	070		-10cm ~ -15cm	鉄釘	
3A	071		-10cm ~ -15cm	鉄釘	
3A	072		-10cm ~ -15cm	鉄釘	
3A	073		-10cm ~ -15cm	鉄釘	
3A	074		-10cm ~ -15cm	鉄釘	第 9 図-49
3A	075		-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	076		-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	077			文書	
3A	078			文書	
3A	079		-10cm ~ -15cm	鉄釘	
3A	080		-10cm ~ -15cm	鉄釘	
3A	081		-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	082		-10cm ~ -15cm	鉄釘	第 9 図-52
3A	083		-10cm ~ -15cm	土師器蓋	
3A	084		-10cm ~ -15cm	土師器	
3A	書外	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	漆器 (シジミ器)	写真図版 11-2-97
3A	平明	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	不明鉄製品	第 9 図-56
3A	平明	1967/12/20	-10cm ~ -15cm	不明鉄製品	第 9 図-57





### 第3節 出土遺物

大阪府立四條畷高等学校で保管している、昭和42年度発掘調査出土資料は、前節第1表のとおりである。これらのうち、図化が可能なものや、破片であるが特徴的な遺物を中心に、第7～9図に図化した。

#### 1. 昭和42年12月調査 包含層出土遺物

第7図-1～29は昭和42年出土の土師器である。1～19は皿、20・22～29は器種不明、21は甕である。そのほとんどは16世紀に属するものである。1・2・4・11・13の皿には口縁端部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものとみられる。30は不明の土器である。黒色土器の高台であろうか。(写真図版10-1、10-2)

第8図-31は白磁の碗である。12世紀代に属するものである。32・33は国産陶器である。32は天目茶碗である。34～41・43・44は瓦質土器である。34・35は播鉢である。34の方が古く16世紀中頃から後半、35は16世紀末から17世紀初頭である。36・41・43・44は器種不明であるが、36は透孔の痕跡があることから、風炉の破片であろうか。また、41は釜の破片と思われる。37～40は浅鉢である。37は口縁端部下に菊花文のスタンプが施されている。42は機種不明土師器である。釜の破片であろうか。45～47は石製品である。45は砥石である。46・47は碁石である。46には表裏に斑点状の墨痕がある。(巻頭写真図版2-2、写真図版11-1)

第9図-48～59は金属製品である。48～54が鉄釘である。55は板状鉄製品である。武具あるいは刀装具等の一部の可能性がある。56～57は不明鉄製品である。58は銅製煙管の雁首であり、18世紀に属するものである。59は筒状の銅製品である。鍍金痕跡がある。また、95～97は貝類である。いずれもシジミ科である。(巻頭写真図版2-2、写真図版11-2)

(實盛・村上 始・田中)

### 第4節 その他の採集遺物

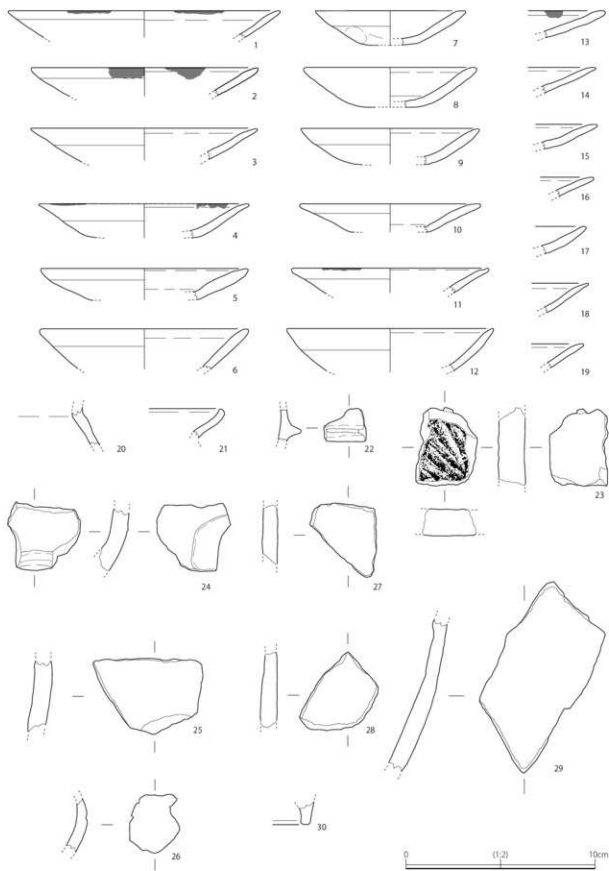
大阪府立四條畷高等学校では、昭和42年度発掘調査出土資料以外にも、随時採集された飯盛城跡出土遺物を保管している。これらのうち、採集日が判明するものや特徴的な遺物を中心に、第10～12図に図化した。

#### 1. 昭和42年5月3日 試掘調査時 「東の丸一の曲輪(曲輪31)出土遺物

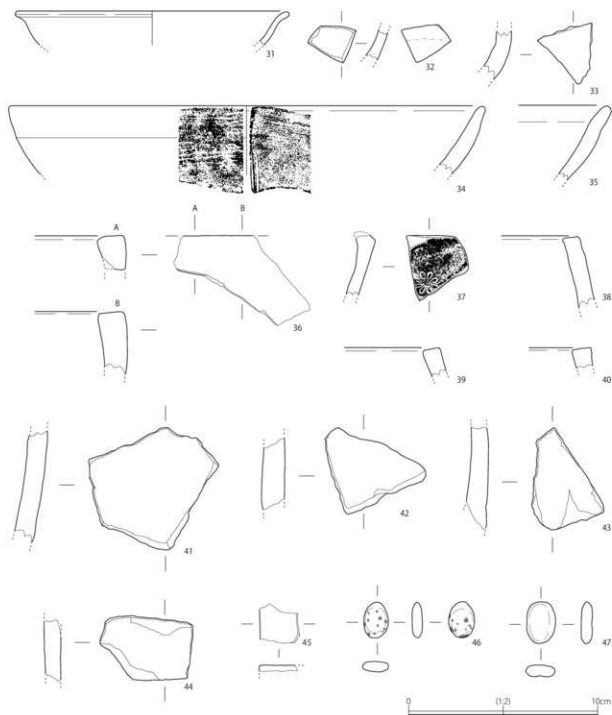
第10図-60～72は昭和42年5月3日の試掘調査時に「東の丸一の曲輪(曲輪31)出土の土器、木製品、石製品、金属製品である。60～64は土師器の皿である。60・64は16世紀中頃から後半のものである。63は16世紀後半から17世紀前半のもので、口縁部に煤が付着しており、灯明皿である。65～67は瓦質土器である。鉢の破片と思われる。69は漆塗りで円形の木製品で、盤双六駒の可能性ある。70は砥石である。71は銅製の目貫である。表面に小さな金色が見られ、鍍金痕跡の可能性ある。裏面中央に目釘と思われる欠損痕があり、目釘と一体に制作されたものと考えられる。72は鉄釘で、5本の釘が錆着している。東の状態で遺棄された可能性がある。(巻頭図版2-2、写真図版12-1)

#### 2. 昭和42年5月3日 試掘調査時 「北の丸(御体塚横)」(曲輪59)出土遺物

第10図-73～76は昭和42年5月3日の試掘調査時「北の丸(御体塚横)」(曲輪59)で出土した土師器の皿である。73は16世紀から17世紀代のものである。76は口縁部に煤が付着しており、灯明皿である。98は貝類である。そのほとんどが失われており詳しくは不明であるが、マルスダレガイ科であろうか。77は参考資料で火縄銃の弾である。鉛製とみられる。昭和42年の出土遺物ではないが、令和元年9月に曲輪59南端部、塙列建物跡の西側付近で表探資料として収集されたものである。(巻頭写真図版2-2、写真図版12-2)



第7図 出土遺物（昭和42年12月①）

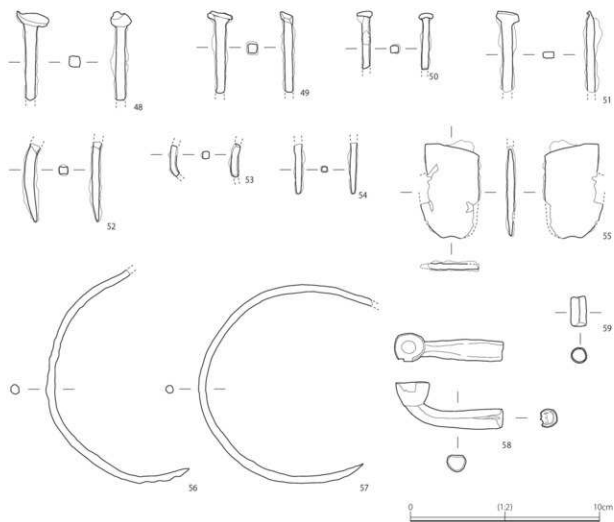


第8図 出土遺物（昭和42年12月②）

### 3. その他採集遺物

第10図-78は昭和41年12月冬休み「東の丸」（曲輪31）で採集された銅製の切羽である。側面に鍍金の痕跡がある。79は昭和41年9月1日に「東の丸」（曲輪31）で採集された銅銭（元豊通寶）である。高さ1.8cm、最大径5.5cm、厚さ0.3cmの土師器（参考2・現在は行方不明）と共伴して採集したという。80は常滑焼の大甕である。16世紀後半に属するものである。（巻頭写真図版2-2、写真図版12-2）

第11図-81~83は丸瓦である。いずれも布目痕がある。第11図-84~89は埴である。87は「御体塚東方」（曲輪59）で昭和42年12月21日採集のものである。（写真図版13~15）

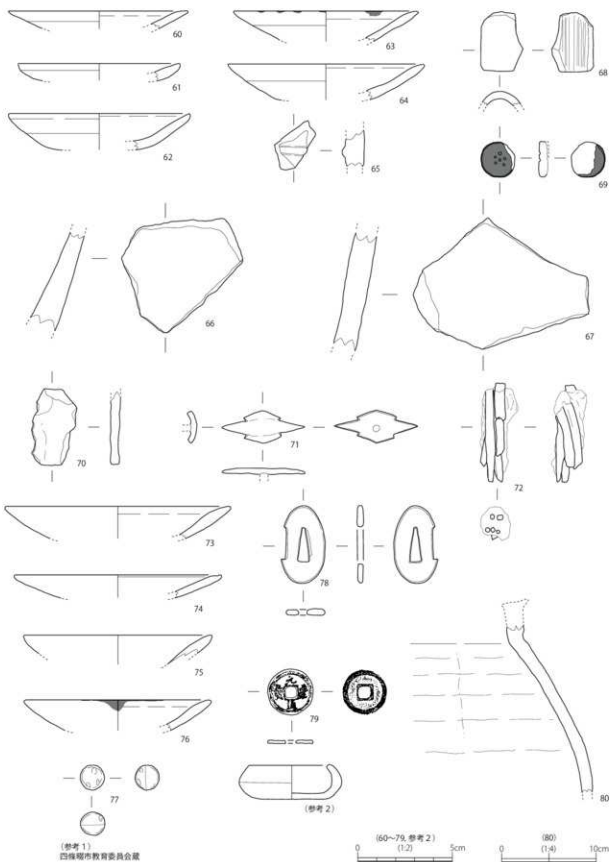


第9図 出土遺物（昭和42年12月③）

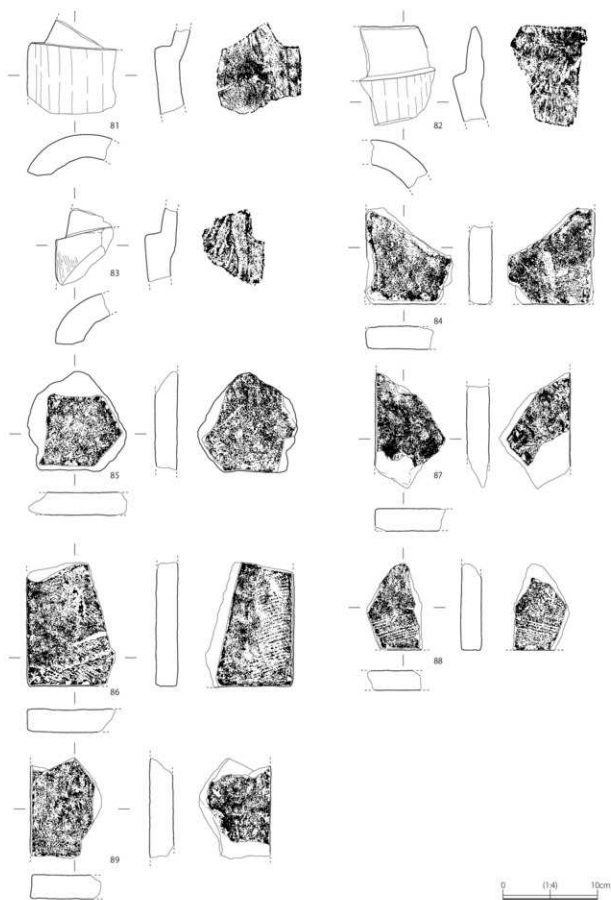
#### 4. 「麿御机神社」（字宮谷）採集遺物

第12図-90～94は昭和20年代に採集された可能性がある瓦類である。いずれも墨により「麿御机神社」と筆書きの注記がある。これらは江戸期の南野村文書に「飯盛山ニノ丸に鎮座」とされる（山口1990）、飯盛山北麓の御机神社旧社地（字宮谷）で採集したものと考えられる。90～93は平瓦である。94は鬘斗瓦である。（写真図版16）

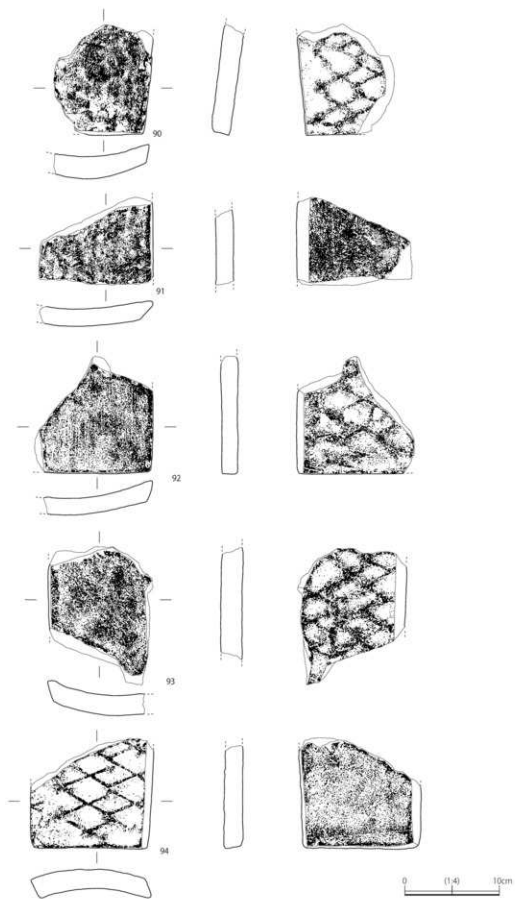
（實盛・村上・田中）



第10図 出土遺物 (採集)



第11図 出土遺物（瓦・埴）



第12図 出土遺物 (「麩御机神社」)



## 第4章 大阪府立四條畷高等学校昭和42年度

### 飯盛城跡発掘調査の意義

#### 第1節 四條畷高等学校地歴考古学クラブの歴史

大阪府立四條畷高等学校に考古学クラブが誕生したのは、昭和25年4月のことであった(第1期)。クラブでは顧問片山長三の指導により四條畷市更良岡山遺跡や枚方市田口山遺跡、同徳谷遺跡などの調査を行っており(大阪府立四條畷高等学校記念誌委員会編2006)、昭和20年代の日誌の写しによれば、昭和28年12月25日と、29年3月～4月に飯盛城跡の調査もおこなっていた。

その後、昭和36年度の3年生引退で一時クラブは休眠状態にあったが、昭和39年4月に山口博を顧問に迎え、坂元直哉を中心に地歴考古学クラブ(当初は同好会)として復活した(第2期)。のちに昭和51年度の3年生引退による二度目の休眠期を経て、昭和54年に再復活し、途中1年ほどの休眠期間を幾度か挟みながら平成9年度まで活動していた(第3期)。

#### 第2節 クラブによる飯盛城跡調査

第2期には坂元を中心に精力的に飯盛城の調査研究を行い、その成果は部誌『古流』にまとめられ(四條畷高校地歴考古学部1965・1966)、坂元により学会にも報告された(坂元1967a、b、1968)。

その研究の大きな成果は、縄張りの配置を図面とともに報告したことであり、以後の研究の礎となった。調査は現地での実測を伴う高い精度のもので、初めて主要部以外の東西の尾根にのびる曲輪群を曲輪として認識した。また、東側に城門や井戸を認識し、図面とともに報告した。

坂元の卒業後もクラブでは飯盛城の調査を継続し、昭和42年には5月と12月に「東の丸一の曲輪」において発掘調査を実施した。翌年に報告書をガリ版刷りで刊行しており(東の丸調査報告係編1968・本書付編1)、後に部誌において報告がなされた(岩田・江藤・出口・藤原1969・本書付編2)。調査スナップ写真、調査日誌、出土遺物の一部が現在も四條畷高校社会科教室に保管され、内容を知ることができる。それらによれば、調査は5月3日と12月16日～22日に行われた。5月の調査はトレンチの規模と断面図を記録しており、地表下約30cmで「花崗岩風化物」を確認し地山と認識した。刀の目貫とみられる銅製品(本書26頁第10図-71)が出土し、注目に値する。12月にはトレンチ2カ所を設け、それぞれ一辺1mの正方形グリッドを設定し、掘削は深さ5cmごとに人為的に土層を分割し、グリッドと土層ごとに遺物を取り上げ、出土位置を記録した。図面に「垂心」の記載があり、平板を用い測量していた。最終的に地表下約30cmで花崗岩風化土を確認したが、そこからも土器が出土したことを今後の課題として報告した。出土遺物も一部略図と計測値を載せ報告しており、土師器・瓦質土器を含む土器片352、瓦片9、鉄釘34、白磁1、貨幣1のほか、円筒形の銅製品(本書25頁第9図-59)や、煙管(本書25頁第9図-58)などが出土した。これ以前の踏査採集遺物も略図とともに報告し、その中に土器とともに採集した銅銭(本書26頁第10図-79)、刀の鐔部分の金具である切羽とみられる銅製品(本書26頁第10図-78)などが含まれていた。また、「廃御机神社」採集とされるものが数点あり(本書28頁第12図-90～94)、実物には墨書きの注記があるため昭和20年代採集品の可能性がある。これは江戸期の南野村文書に「飯盛山二ノ丸に鎮座」とされる(山口1990)、飯盛山北麓の字宮谷で採集したものと考えられる。

こういった中で部活顧問である山口博が坂元と共同で研究発表を行い(山口・坂元1967)、引き続き自費出版の四條畷町史と(山口1968)、四條畷市制施行後の市史に成果を掲載し(山口1972)、城跡の内容が広く知られるようになった。

第2表 大阪府立四條畷高等学校地歴考古学クラブ年表

年	出来事
昭和23年(1948)	片山長三氏を中心に、考古学クラブの前身となる「葉柏会」結成
昭和25年(1950)	4月 考古学研究クラブ結成 機関誌『古流』(1期)
昭和28年(1953)	地歴クラブ結成 機関誌『郷土地誌』
昭和36年(1961)	3月 3年生卒業で地歴クラブ休部
昭和37年(1962)	3月 3年生卒業で考古学研究クラブ休部
昭和39年(1964)	1月 有志により地歴考古学クラブ準備委員会設立
	4月 坂元直哉氏を中心に、旧地歴クラブと旧考古学研究クラブを合同して、地歴考古学同好会として復活 顧問 山口 博 氏 (2期)
昭和40年(1965)	1月 31日に小松寺跡を調査
	4月 地歴考古学クラブに昇格
	6月 『古流』1号刊行
	7月 更良岡山遺跡発掘調査
昭和41年(1966)	2月 『古流』2号刊行
	7月 更良岡山遺跡発掘調査
昭和42年(1967)	12月 飯盛城跡東ノ丸1の曲輪(曲輪31)発掘調査
昭和43年(1968)	8月 更良岡山遺跡発掘調査
	10月 『古流』3号刊行
昭和44年(1969)	10月 『古流』4号刊行
昭和45年(1970)	10月 『古流』5号刊行
昭和46年(1971)	10月 『古流』6号刊行
昭和47年(1972)	10月 『古流』7号刊行
昭和48年(1973)	10月 『古流』8号刊行
昭和49年(1974)	9月 『古流』9号刊行
昭和50年(1975)	9月 『古流』10号刊行
昭和51年(1976)	3年生引退で12月までに休部
昭和54年(1979)	地歴考古学クラブ復活(3期)
昭和58年(1983)	部員1人となる
昭和59年(1984)	休部
昭和60年(1985)	4月 地歴考古学クラブ復活
平成6年(1994)	部員全員が社会科学研究部と兼部し活動低調に
平成7年(1995)	休部
平成9年(1997)	7月 部員追加入部との記録あり
平成10年(1998)	休部
平成12年(2000)	正式に廃部

### 第3節 クラブによる調査の意義

四條畷高校の生徒による飯盛城跡の調査の特徴は、学生を主体とした活動でありながら、考古学的にみても十分な情報を得ていることである。飯盛山の主尾根以外にも城跡の曲輪が広がることを初めて確認し、報告したのはこれらの学生たちであった(四條畷高校地歴考古学部 1965・1966)。図化を伴うことで客観的具体的な報告が心がけられており、現代考古学の視点からみても価値の高い報告であると言える。山頂付近が木々に覆われる以前の記録として、またNHK飯盛山FM送信所が建設される以前の状況を示す資料として貴重な内容を含んでいる。

なかでも昭和42年12月の発掘調査は、当時考古学分野で標準だった平板測量の手法で調査地区の図化をおこない、人工的に層序を分けることで部員間の土層観察経験の浅深を克服し、遺物出土位置と層位が細かく記録されていた。その出土遺物は、来歴の知らない資料や、出土地が伝聞されたのみの資料とは異なり、出土位置や状況が正確にわかる第一級の考古学資料と言えるだろう。

これらの資料を用いることで、現代の高校生たちによる研究により、新知見が明らかとなった。その内容は、第5章および6章に掲載した論考のとおりである。これまで飯盛城跡ではⅣ郭より南が居住空間、Ⅰ郭より北が軍事空間と認識されてきた(中井2013等)。しかし、第5章で述べられているように、軍事空間として認識されてきた北側の曲輪群の、主要域から東側に杖状にのびる曲輪群においても、武士層による生活痕跡が残されることが判明した。出土した白磁や天目茶碗(本書24頁第8図-31・32)の存在から、一定の地位を持つ人物(「位の高い武士」)の存在が想定される。これについて文献面から検討をおこなったのが第6章で、そこに述べられているように、三好長慶は飯盛城内に家臣を居住させており、その場所として「河内国飯盛旧城絵図」(『美濃加納永井家史料』東京大学史料編纂所蔵)では、「三ヶ殿曲輪」との記述が同様に主要域から西側に杖状にのびる曲輪群に記されている(天野2020)。この絵図は同時代史料ではないため慎重に扱う必要があるが、宣教師による記録と併せて考えるなら、長慶が家臣を居住させていたのが主要域から東西に杖状にのびる各曲輪群だった可能性は十分にあるといえる。これを踏まえて導き出された、飯盛城において三好長慶は山頂部の曲輪群を保有し、家臣団を山頂部から杖状にのびる各尾根の曲輪群に配置していたという見解は一定の説得力を持つといえる。このことから提唱している「中世城郭から近世城郭への画期は飯盛城にある」との大胆な指摘は、例えばいわゆる織豊系城郭にみられる樹形虎口がまだ飯盛城では確認できないといったような課題点はあるものの、城主の所有曲輪と家臣の配置された曲輪には確かに指摘通り階層性を読み取ることができる。このことから考えると、飯盛城は近世城郭への萌芽を読み取ることができる画期となる城郭のひとつといつて差し支えないであろう。(實盛)

※元部員の坂元直哉氏・大下隆氏・江藤敬直氏・野間康三氏から資料の提供を得た。出土銅製品の鑑定は村瀬陸氏(奈良市教育委員会)の協力を得た。記して謝意を表したい。

本稿は、令和4年7月23日に「クローズアップ飯盛城2022」で行った講演内容をその後の成果に基づき改稿したものである。

## 参考文献

- 岩田美奈子・江藤敬直・出口和美・藤原ひろみ1969「飯盛城址の研究—飯盛城東ノ丸—ノ曲輪調査報告—」『古流』第4号、四條畷高校地歴考古学クラブ。
- 大阪府立四條畷高等学校記念誌委員会編2006『昭和百年史』大阪府立四條畷高等学校創立100周年記念事業実行委員会。
- 大阪府立四條畷高等学校「昭和八十年史」編集委員会編1987『昭和八十年史』大阪府立四條畷高等学校同窓会。
- 坂元直哉1967a「飯盛城」『日本城郭全集』9、大阪・和歌山・奈良篇、人物往来社。
- 坂元直哉1967b「河内飯盛山城」『城春』第8号、日本城郭近畿学生研究会。
- 坂元直哉1968「河内飯盛城」『城』第47号、関西城郭研究会。
- 四條畷高校地歴考古学部(坂元直哉編)1965「飯盛城址の研究」『古流』第1号、四條畷高校地歴考古学部。
- 四條畷高校地歴考古学部(坂元直哉編)1966「飯盛城址の研究(二)」『古流』第2号、四條畷高校地歴考古学部。
- 東の丸調査報告係(岩田美奈子・江藤敬直・出口和美・藤原ひろみ)編1968「飯盛城東の丸の曲輪調査報告」地歴考古学クラブ。
- 山口 博・坂元直哉1967「河内飯盛城」『城と陣屋』13号、日本城郭協会近畿支部研究会。
- 山口 博1968「河内飯盛城」『四條畷町の歴史』。
- 山口 博1972「中世の四條畷」『四條畷市史』第1巻、四條畷市役所。
- 山口 博1990『四條畷市史』第4巻、四條畷市役所。
- 李 聖子編2020『飯盛城跡総合調査報告書』大東市教育委員会・四條畷市教育委員会。

## 第5章 出土遺物からみた飯盛城跡の曲輪機能

古家百恵・佐藤 凜・新羽坪里花・松下美桜

(大阪府立四條畷高等学校 76期生)

### 要旨

昭和42年度に飯盛城跡で先輩方が発掘した場所にどのような機能があったのかをリサーチクエスチョンとし、考古学的な手法で遺物の整理を行った。整理した遺物から、発掘場所は位の高い武士達が生活していたと考えた。今後はそれらの遺物と史料を結びつけ、飯盛城全体の曲輪機能を再検討する必要がある。

### Abstract

In 1967, Shijonawate high school seniors excavated the ruins of limori castle. The research question is "What actions were done in the past at the excavated site?" We are using archaeological methods to organize the artifacts. From looking at the artifacts, we believe that the excavation site was inhabited by high-ranking samurai. It is necessary to continue this research.

## 1. 序論 執筆者 古家百恵

### 1-1. 研究背景

近年、四條畷市と大東市は飯盛城跡の調査をおこない、国史跡指定のため国に働きかけた。飯盛城は織豊系山城に先行して、石垣や瓦葺、礎石建物を取り入れた稀有な事例であり、織田信長に先駆ける最初の天下人と評価されている三好長慶が居城としていた。このような歴史的価値が認められ、2021年10月11日に国史跡に指定された。両市は三好長慶の動画や飯盛城3DCGを作成するなどしてPRしている。このように、四條畷市と大東市が力を入れている飯盛城跡発掘調査を背景に、四條畷高校に保管されていた遺物が注目された。過去に四條畷高校に存在した地歴考古学部は、飯盛山で発掘調査をおこなっており、発掘された遺物や発行されていた部誌が整理されていない状態で地歴教室に残っていた。

### 1-2. 研究史

昭和6年に平尾兵吾氏がまとめた北河内地域の史跡に関する調査には、本丸であるⅡ郭と見られる箇所から「甕、壺、瓦片、土器、刀剣、金具の残片」、「石製の米搗臼」などが出土したことが記されていた。また北側にあるV、VI郭を北方山頂の防御域であると述べた(平尾1931)。

平成25年発表の飯盛山城跡測量調査報告書には、堀切や曲輪群の位置など飯盛城全体の構造が細かく記されて

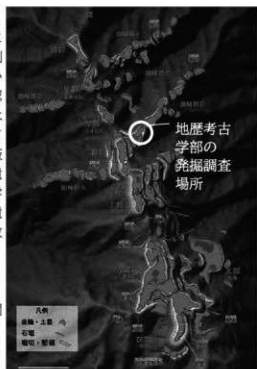


図1 縄張り図

四條畷市教育委員会 四條畷市立歴史民俗資料館  
大東市 大東市立歴史民俗資料館 (2022)  
クローズアップ 飯盛城 2022 資料集より

いる。そこでは、中井均氏により南方にある千畳敷Ⅶ郭は北方の曲輪と比べて広大な面積を有しており、山上部に居住空間の存在した曲輪群であると考察されている（中井 2013）。

中井氏の調査に基づいた四條畷市と大東市の教育委員会による測量調査と分布調査および発掘調査では、北エリアは主尾根に築かれた曲輪の面積が狭く起伏が激しいことや主尾根から東西に派生する尾根上に曲輪群が展開していること、南エリアは広大な面積を有する曲輪が築かれていることが明らかになった。このことから、北エリアは防衛空間、南エリアは居住空間という機能が想定されることが改めて確認された。

千畳敷Ⅶ郭・Ⅸ郭では、曲輪内で礎石を検出し、日常用具が出土したことから、居住空間としての利用が推定されている（大東市教育委員会・四條畷市教育委員会、2020）。この調査は前述の平尾氏と中井氏の調査結果と合致している。

上記の3つの調査は飯盛城跡の主要部である尾根におけるものであったが、その3つの調査とは別の場所で調査をしたのが四條畷高校地歴考古学部である。昭和20年代に発足した地歴考古学部は、一時休眠状態を経て昭和42年度に飯盛山での調査をおこなっていた。それは主要部以外の東西に伸びる曲輪群におけるものであった。

### 1-3. 研究意義

研究史でも述べたとおり、四條畷市と大東市が飯盛城の主要部で行った調査結果から、北側は防衛・軍事域、南側は居住域との見解がもたれている。そして、地歴考古学部の発掘調査は主要部以外の東西に伸びる曲輪群（城に作られた、土地を平らにした部分）であり、そこはまだ機能が正確にわかっていない。

そこで、リサーチクエストを「当時、飯盛城跡で先輩方が発掘調査をした場所にどのような機能があったのか」とした。また、先述べた市の見解と、発掘調査の場所から、仮説を「その場所には武士がいて軍事的な役割を果たしていた」とした。

この研究を進めることで、学術に貢献し、市の町おこしに繋げていきたい。

## 2. 研究方法 執筆者 佐藤 凜

### <調査>

#### 2-1. 研究の目的と仮説

過去に四條畷高校に存在した地歴考古学部は、昭和42年に飯盛山で発掘調査をおこなっており、発掘された遺物や発行されていた部誌が整理されていない状態で地歴教室に残っていた。部誌には、トレンチと呼ばれる溝を掘り精度の高い発掘をおこなったことや、遺物出土位置と層位が細かく記録されていたことより、この調査が考古学的な手法を用いた本格的なものであったことがわかる。そのためこれらの資料は、考古学資料として非常に価値があるものとされている。しかしこの資料についてはこれまで詳しい研究がなされていなかった。

そこで、この資料を用いて研究を進めていくこととし、リサーチクエスト及び、仮説を上記の通りとした。

#### 2-2. 研究対象と手順

地歴考古学部が昭和42年度に飯盛城跡で発掘した遺物を研究資料とした。地歴考古学部は発掘した個々の遺物をラベル代わりの新聞紙に包み、さらに調査地区ごとにビニールの袋にまとめ保管していた。新聞紙には調査地区名と出土層位番号および遺物番号が記録され、各袋には出土日と調査地区名が記された紙製のラベルがつけられていた。よって以下の手順で遺物の整理および研究を行った。

1. ラベル代わりの新聞紙から遺物を取り出す。



図2 洗浄

2. ビニールのラベルに、新聞紙に記されていた発掘場所を示す記号を書き写す。
3. 遺物を洗浄後、注記する。(図2、図3)
4. 遺物、新聞紙、ラベルをチャック付きの袋にまとめる。(図4)
5. 目録を作成し、分析する。

はじめに新聞紙に包まれた遺物を取り出した。続いて、ビニールのラベルに発掘場所を示す記号を書き写した。そして遺物を洗浄したあと、注記をした。洗浄とは遺物についている土や泥をブラシを使って洗い流す作業で、注記とは遺物自体に先程のラベルに書いた記号を書き写す作業である。

その後、遺物、新聞紙、ラベルをチャック付きの袋にまとめた。そして、整理を終えた遺物を一覧にまとめた目録を作成した。作成した目録には以下の5つ項目を表記した。トレンチでわけた調査地区番号、遺物番号、発掘された日付、層位、および遺物の種類である。また、発掘されたが地歴教室に残っていない遺物は備考に欠番と表記した。そして最後に、完成した目録を用いて分析を行った。



図3 注記

図4 整理

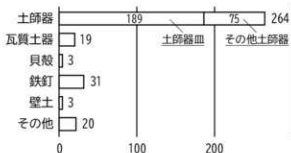


図5 遺物の種類と数

### 3. 結果・考察 執筆者 新羽坪里花

#### 3-1. 結果

地歴教室に残っていた部誌の記録より、当時の出土数は446点、今回の遺物の整理によって、現在、地歴教室に残る遺物の数は340点であることが分かった。図5は、整理した遺物の種類と数を表す。



図6 土師器皿(灯明皿)

他の遺物と比べて圧倒的に多い264点の土師器のうち、189点が土師器の皿だった。また、その他の項目の20点の中には、天目茶碗、瀬戸美濃焼の皿、刀の部品などが含まれている。

#### 3-2. 考察

左の写真に写るのは土師器の皿(図6、本書23頁第7図-4)である。カケラの左下に見える黒いすずは、この皿が灯明皿として使われていた証拠になる。灯明皿は、皿に油を入れ、そこから出した糸などに火をつけ、照明として用いられていたものである。また、灯明皿の他にも、羽釜や甕、すり鉢なども確認できた。

このように、生活的な遺物が多く見つかったことから、発掘場所では人々が生活していたと考えた。

左の写真に写るのは順に切羽と呼ばれる刀の鐔の一部分(図7、本書26頁第10図-78)と、目貫と呼ばれる装飾金具の一部(図8、本書26頁第10図-71)である。

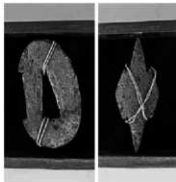


図7 切羽 図8 目貫

一般的に武士などの戦に従事していたものは武具を用いていたが、戦に従事していない農民などが武具を用いていた可能性は低いとされており、刀の部品が出土したという事実は武士の存在を示唆している。そもそも発掘場所は飯盛城の跡地であり、武士が存在していた可能性

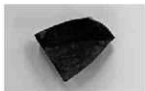


図9 天目茶碗

は十分にありと考えられる。以上のように、刀の部品が出土したことから、発掘場所の曲輪には武士が存在していたと考察する。

次に、左の写真に写っているのは天目茶碗の欠片（図9、本書24頁第8図-32）であり、中国から伝わった茶の湯のための道具である。茶の湯は当初は嗜好的なものに過ぎなかったが、後に将軍や上層武家が權威を誇示する場となり、中国から輸入された「唐物」と称する高貴な品々を使って喫茶がおこなわれていた（仁木、1999）。天目茶碗は「唐物」の中でも希少

なものであり、足軽などの一般の武士は所有する機会がないとされる。これらのことから、発掘場所では位の高い人物が存在していたと考察する。

#### 4. 結論・展望 執筆者 松下美桜

発掘された遺物から、本研究を進めた曲輪が生活的機能を有していたこと、武士が存在していたこと、天目茶碗を所有することができる程度に位の高い人物が存在していたことなどを考察した。

これらの考察から、曲輪では位の高い武士たちが生活していたという結論に至った。よって、先行研究では本研究の曲輪は飯盛城の北側に位置しており防御・軍事域との見解が持たれていたが、曲輪が軍事的機能だけでなく、生活的機能をも有していたことが考えられる。

このように本研究で導き出した曲輪の機能が先行研究での見通しと異なっていたことから、飯盛城全体の曲輪の機能が先行研究での見通しと異なる可能性がある。そのため、改めて飯盛城全体の曲輪機能を見直す必要がある。今後本研究で整理した遺物と四條畷市と大東市の先行研究により発見された曲輪に関する史料とを結びつけることで、曲輪機能の再検討をおこなうことが望まれる。

#### 謝辞

本論文の作成にあたり、多くの方々のご助言を賜りました。

考古学のことを一から教えていただき、遺物の扱い方や考察の方法、研究発表におけるアドバイスなど、終始適切な助言を賜り、細部にわたり暖かく丁寧に指導して下さいました四條畷市教育委員会スポーツ・文化財振興課實盛良彦さんに心より感謝申し上げます。

同課田中香里さんには、生物考古学という新たな視点からの遺物の見方を教えていただきました。ここに感謝いたします。

滋賀県立大学名誉教授中井均先生には、本研究において大きなヒントとなる助言を頂きました。感謝申し上げます。

元四條畷高校地歴考古学部員の坂元直哉さん、江藤教直さん、野間康三さんには、当時の部活動の貴重なお話、激励を頂きました。記して感謝いたします。

（原題：昭和42年度飯盛城跡発掘調査を掘り起こそう!! 令和5年3月22日提出）

#### 引用文献・参考文献

- ・四條畷市教育委員会・四條畷市立歴史民俗資料館・大東市・大東市立歴史民俗資料館（2022）『クローズアップ 飯盛城 2022 資料集』
- ・平尾兵吾（1931）『北河内郡史蹟史話』
- ・中井均「飯盛山城跡の構造」（2013）『飯盛山城跡測量調査報告書』四條畷市教育委員会
- ・大東市教育委員会・四條畷市教育委員会（2020）『飯盛城跡総合調査報告書』
- ・實盛良彦（2021）『「天下の支配者」三好殿 一考古学から見た天下人三好長慶の軌跡と飯盛城—』四條畷市立歴史民俗資料館
- ・四條畷高校地歴考古学部（1969）『古流 No.4』
- ・仁木正格「唐物の天目茶碗より雑器の美」（1999）『すぐわかる日本の美術』

## 第6章 三好長慶による飯盛城における家臣統制

～地歴考古学部の資料から～

宇治田健祐・佐々井右京・曾根 颯・那須大輔・原 慈生・三村阜月

(大阪府立四條畷高等学校 77 期生)

### 要旨

76期54班の研究を引き継ぎ飯盛城から発掘された遺物の洗浄・注記・接合と並行して文献調査を行うことによって、織田信長に先駆ける天下人である三好長慶が居城していた飯盛城の曲輪の機能を解明しようとした。その結果飯盛城は城主の三好長慶が山頂に住み、家臣をその周囲に住ませることで高低差を利用して社会的身分を家臣に示す構造、いわゆる近世城郭的な構造を取っており、近世城郭の萌芽が確認できる最初の城郭ではないかと考察した。

### Abstract

Last year, our seniors from this school found out that high ranking Samurais lived in a castle in northern limori. We will take over their research and think about the operations of limori castle. We researched using various pieces of literature. For these research results, we believe, as a morden castle, no castle in Japan is older than limori castle.

### 1 概要 執筆者 宇治田健祐・原 慈生

三好長慶は戦国時代を生きた武将である。彼は室町幕府13代將軍足利義輝を京都から追放し、都の政治の実権を握った人物として知られている。実際、同時代のキリスト教宣教師の文献などに「天下を治めていた」「天下の支配者」といった内容が記載されている。

その三好長慶が1560年から居城としていたのが飯盛城である。近年四條畷市、大東市は飯盛城に注目をしており研究を進めている。それによって当城は織豊系城郭に先行して石垣や礎石建物を取り入れた先進的な中世城郭ということが明らかとなった(大東市教育委員会・四條畷市教育委員会2020)。このような歴史的価値から飯盛城は令和3年に国史跡に指定された。当城跡は四條畷市と大東市の合同調査によって少しずつ全容が明らかになっているが、未だ不明瞭な点が残っている。そこで過去に大阪府立四條畷高等学校(以下四條畷高校)に存在していた地歴考古学部の飯盛城跡で発掘し、その後同校の地歴公民科教室に保存されていた遺物を整理し、そこで得た情報と文献調査で得た情報を組み合わせて飯盛城の機能、構造を検討する。またそこで明らかとなったことから三好長慶がどのように家臣統制を行っていたのかを解明したい。

本研究は前年度の四條畷高校76期生による「昭和42年度飯盛城跡発掘調査を振り起こそう!!」の研究を引き継ぐものである。前研究では地歴考古学部の発掘した遺物を基に飯盛城跡の研究を行った。そこでの考察は「本来軍事区域域だと思われていた飯盛城の北側にも武士が住んでいた」というこれまでの研究に一石を投じるような内容であった。しかし前研究は遺物の整理が不十分のまま終わってしまった。そのため本研究では遺物の整理を引き続き行い、飯盛城研究においてあまり用いられていない文献資料も併用して曲輪の機能を再検討していく。

### 2 先行研究 執筆者 宇治田健祐・那須大輔

飯盛城の城郭としての詳細な研究は、平尾兵吾が昭和6年(1931)にまとめたものを基礎に進めら



れてきた(平尾 1931)。ここでは本丸、高櫓、千疊敷など現在も使用される曲輪の名称が示された。この時点では、南方の曲輪が大規模であったため南側の防御が厳重であるとした。しかし昭和 56 年(1981)に中井均は飯盛城の防衛機能について平尾の考察とは全く異なる見解を述べている(中井 1981)。中井は本郭より北の堀切によって独立している一ブロックの郭群があり、そこを北方防備の最前線とした。一方南方については、南丸や千疊敷が防衛線を張りつつも馬場辺りの曲輪には兵站施設などがあつたと推測し、防備に関しては北方に比べて弱く、支城群の多さに表れていると記した。このような見解の相違は四條畷高校地歴考古学部による東西方向の尾根に作られた曲輪群の存在の発見によるものである(四條畷高校地歴考古学部 1965、後述)。この成果により前述のように飯盛城の防衛機能についての説が一転している。中西裕樹は平成 6 年(1994)に、南北に伸びる飯盛城跡の曲輪を三つ(I、II、III部)に区分して検討した(中西 1994)。I部は北端から「御体塚丸」、そこから派生する三つの尾根を含んだ部分であり、II部はそれより南から本郭、高櫓郭周辺、加えて派生している三つの尾根を含んだ部分である。この二つは堀切や石積みが多く設けられ、城域南部の千疊敷から南丸周辺を含むIII部と比べ、防御性が強いと述べた。この要因として野崎城からのルートが飯盛城南部に繋がっていたためとした。つまり飯盛城は周辺のルート全体を取り込んで分散的な防御性を持たせようとしていると考察している。なお各曲輪には平尾のころから本丸、高櫓、千疊敷などの名称がつけられていたが、現在は中井が平成 25 年に示した I~X郭までの名称がより一般的に用いられている(四條畷市教育委員会編 2013)。

これらの先行研究を踏まえて四條畷市と大東市は平成 28 年から令和元年度にかけて、飯盛城跡の総合調査を行った。その結果、北側は主尾根に築かれた曲輪の面積が狭く起伏が激しいことや主尾根から東西に派生する尾根上に曲輪群が展開していること、南側は広大な面積を有する曲輪が築かれていることが明らかになった。このことから、北側は防御空間、南側は居住空間という機能が想定された(大東市教育委員会・四條畷市教育委員会 2020)。

また、かつて存在した四條畷高校地歴考古学部は昭和 42 年に飯盛山で総合調査を行った中心部からは外れた曲輪で発掘調査を行っていた。その調査はトレンチと呼ばれる溝を設けた、本格的な考古学的手法を用いたものであった。その後地歴考古学部は休部となったが、令和元年、発掘した遺物が地歴公民科教室に保管されていたことがわかり令和 4 年 76 期 54 班が遺物を整理した。その結果、遺物の中から切羽、天目茶碗、灯明皿を確認し、そこから発掘場所では位の高い武士が生活していた、と結論づけた(古家・佐藤・新羽坪・松下 2023)。このような前年度の考察を元に、我々は飯盛城の北側に家臣が居住し、南側に主君である三好長慶が住んでいたと仮説を立てた。

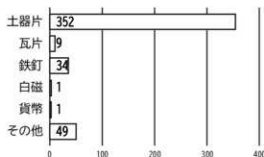


図1 昭和 42 年調査出土遺物の種類と数

### 3 研究方法 執筆者 三村卓月

北側に家臣が住んでいたことを確認するために、我々は 76 期 54 班の研究に引き続き遺物の整理を行った。

出土した遺物の総数は、地歴教室に残っていた当時の日誌、調査報告書(東の丸調査報告係編 1968)、部誌(岩田ほか 1969)の記録により、446 点であった。図 1 はその種類別の内訳を示している。土器片が 352 点、瓦片が 9 点、鉄釘が 34 点、白磁が 1 点、貨幣が 1 点、その他が 49 点であった。

一方、図 2 は現在地歴教室に保管している遺物の

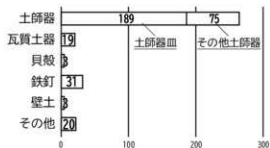


図2 現存遺物の種類と数

種類別内訳である。現存数は340点で、106点は現在行方不明である。内訳は土師器264点、瓦質土器19点、貝殻3点、鉄釘31点、壁土3点、その他20点であった。特に264点の土師器のうち、189点が皿であった。図3のその他の20点には、天目茶碗、白磁の皿、碁石、明治期の銅銭、江戸期の煙管などが含まれている。また、5月の発掘調査で目貫（刀の部品）が、昭和41年12月の踏査で切羽（刀の部品）が見つかった。

これらの出土遺物の検討に加えて、並行して文献史料の精査を行った。史料の探索には『飯盛城跡総合調査報告書』を用いた。探索の結果、特に重要と思われた『フロイス日本史』『十六・七世紀イエズス会日本報告集』については、原翻刻史料を確認した。また、『飯盛城跡総合調査報告書』に報告された『河内国飯盛旧城絵図』（東京大学史料編纂所蔵）も参照した。

これらの文献史料と出土遺物を結び合わせて考察を行った。

#### 4 考察 執筆 曾根 勉

飯盛城が存在した戦国期に拠点として機能した城郭である戦国期拠点城郭の特徴として、政治・軍事・生活機能が一体となっていたことが挙げられる（千田2000）。千田は織豊政権に先駆けた戦国期拠点城郭の初期の例として滋賀の観音寺城を紹介している。その特徴は、本来強い求心性を備えた主郭が作られるべき山頂部は小さな曲輪に過ぎず、主郭が山頂からそれた尾根上に築かれるという並立的な構造であったことである（千田2000）。

他方これまでの飯盛城跡における発掘調査で家臣の居住に關係する遺構・遺物の発見があったことや、京都や堺など多くの政治的権力を持つ要地に視みがかく場所に城が築かれていることから、飯盛城も軍事・生活の両機能を備えた城であったことが推察される。これに関する当時の史料として、日本を訪れたイエズス会士の記録（史料1、史料2）や、江戸時代に記録された飯盛城の絵図（史料3）が挙げられる。

史料1（ルイス・デ・アルメイダ修道士がルイス・フロイス師と共に都へ旅したことにつき、福田で（イエズス）会の修道士らにしたための書簡、一五六五年十月二十五日付）<sup>1)</sup>

「(前略)これらの貴人たちは皆、今や都とその周囲の国々を領する国主の家臣であり、その国主は三好殿（長慶）殿と称する。彼は領国中で最も強固な城の一つである当城（飯盛城）に、己れの最も信頼する家臣らと一緒に留まっており、また、彼ら（家臣）は家族や妻子とともに同所に住んでいる。(後略)」

史料2（都へ出発するまでに、堺の市においてルイス・デ・アルメイダ修道士の身に生じたこと）<sup>2)</sup>

「(前略)三ヶサンチョ（頼顯）殿という（三ヶの）城の主だったキリシタンの一は、私たちがそこに着くということをすでに前から聞き知っていましたので、船を遣わしてくれていたのです。(中略)彼らはいずれも、今や都、及び周辺の諸国を支配している当国主の高貴な家臣たちで、その国主の名を三好殿と言います。国主はこの城がその領国中で最も堅

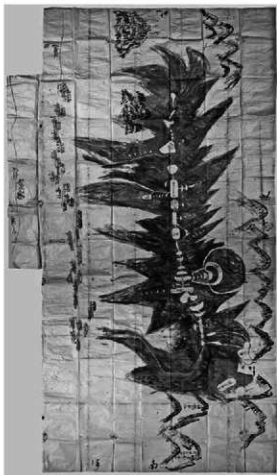


図3 史料3 河内国飯盛旧城絵図  
(美濃加納永井家史料、東京大学史料編纂所蔵『飯盛城跡総合調査報告書』より)

固な城の一つなので、当城に留まり、上記の貴人たちを極めて信頼していますので、彼らを傍に置き、一方彼らは家族妻子ともどもここに住んでいるのです。（後略）

これらに加えて、河内国飯盛旧城絵図には、北側にある曲輪に「三ヶ殿曲輪」の文字列が見受けられる。史料2の「三ヶサンチョ（頼照）殿」と同一人物と考えられる。<sup>31</sup>

これらの史料からは、飯盛城城主であった三好長慶が自身の家臣とともに飯盛城に居住していた事や家臣の家族や妻子が飯盛城に住んでいたという事が読み取れる。これは、飯盛城跡の遺構に居住区域があったという発掘調査の結果と一致しており、飯盛城が生活機能を備えていた可能性は高い。城主の長慶が住んでいたのは、中井均が指摘しているように城郭南部のⅧ郭（千疊敷郭）であったのだろう（中井 2020）。さらに、注目しておきたいのは長慶に加えて家臣が家族や妻子とともに城内に住んでいることである。「貴人」「高貴な家臣」といった表現は飯盛城に居住していた家臣の身分が高かったことを示すものであり、昭和 42 年に飯盛城跡で発掘された高級茶器である天目茶碗の破片から導き出された「(不特定の) 位の高い人物が住んでいた」という結論に一致する（古家・佐藤・新羽坪・松下 2023）。一方、この天目茶碗が発掘されたのは城の北側のことであった。これは四條驛市と大東市が飯盛城の山頂部で行った調査結果から導き出された、飯盛城の北側は軍事域、南側が居住域という見解（大東市教育委員会・四條驛市教育委員会 2020）に一石を投じる結果である。しかし、同じ北側での調査とはいえ、両市の調査は飯盛城の山頂部で行われた一方、先の考察で使用した遺物はその周辺の曲輪（曲輪 31）で発掘されており、両者の機能が異なっていた可能性がある。城郭の構造について、大名が山城の頂上に住んだことは、山腹や山麓に居住した家臣との階層の違いを政治的に表したものであるという見解が存在する（千田 2002）。この見解に従うと、飯盛城の主要部は三好長慶が所有し、周囲の曲輪にはその家臣が住んでいたという考察が成り立つ。現に、先程の史料から三好長慶の家臣である三ヶサンチョ 頼照が北西側の山頂部から外れた曲輪に住んでいた可能性があることが分かっている。また、飯盛城の山頂部の北側の区域ではⅤ郭曲輪 59（御体塚郭）において宗教的な施設が存在が想定されており（大東市教育委員会・四條驛市教育委員会 2020）、三好長慶が飯盛城の北側・南側に関わらず山頂部を所有していた可能性が高まった。このことから、飯盛城が大名と家臣の階層の差を見せつける政治的な舞台となっていたことが推測される。また、安土城以降の織豊系城郭の特徴である石垣や瓦葺の建物・礎石建物（中井 1990）が飯盛城で発見されているとともに、政治・軍事・生活の機能が備わっていることが資料から読み取れる。以上のことから、飯盛城は戦国時代後期において、織豊政権に先駆け、主君を中心とした城郭構造と、石垣・瓦葺・礎石建物という先進的建築様式を兼ね備えた近世城郭の萌芽とも言える例であることが推察される。

## 5 まとめ 執筆者 佐々井右京

このように、飯盛城跡の曲輪における居住状況について昭和 42 年の発掘調査出土資料及び文献資料から検討してきた。飯盛城の主要部は城主・三好長慶が所有し、自身の軍事域・居住域として利用する一方、主要部から東西に延びる周囲の曲輪群にはその家臣が居住していたと考察した。そのことは、城主と家臣の階層の違いを政治的に表していたと考えられる。

## 6 結論 執筆者 佐々井右京

上記の考察から、飯盛城は中世城郭でありながら、山頂部の中心域が城主（三好長慶）の所有とみられ、城主を中心に周囲に家臣団を配置する城造りだということがわかる。このことから、これまで一般的な中世城郭とされていた飯盛城が先述の通り高低差を利用した、主君を中心とした城造りであった点、文献調査や先行研究で明らかになった通り居住機能を有していた点、石垣や瓦葺、礎石建物といった織豊系城郭にみられる先進的な特徴を有していた点という3つの点から近世城郭に近い様式だということが指摘できる。最初の近世城郭と言われている安土城に先行して築かれた飯盛城こそが、

最初の近世城郭への萌芽が確認できる画期となる城郭であったと考察できるだろう。

## 7 展望 執筆 佐々井右京

今後は、本考察の説得力を上げるために調査した曲輪以外の周辺の曲輪の詳細な調査が必要である。また、「理世安民」やキリシタンを許容したという三好長慶の思想などの他の観点からの研究も必要だろう。ひいてはこの研究が、戦国史の学術発展に貢献することを願っている。

## 謝辞

本論文の作成にあたり多くの助言をいただきました四條畷市教育委員会教育部スポーツ・文化財振興課實盛良彦さんに心より感謝申し上げます。

## 註

- 1) 松田毅一監訳1998『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第三期二巻、同朋社
- 2) 松田毅一・川崎桃太郎訳1978『フロイス日本史』第二十章（第一部五十九章）、中央公論社
- 3) 『河内国飯盛山城図』（美濃加納永井家史料、『飯盛城跡総合調査報告書』2020、巻頭図版16）

## 参考文献

- 天野忠幸2020「文献資料から見た飯登城」『飯盛城跡総合調査報告書』大東市教育委員会・四條畷市教育委員会  
岩田美奈子・江藤敬直・出口和美・藤原ひろみ1969「飯盛城址の研究—飯盛城東ノ丸一の曲輪調査報告—」『古流』第4号、四條畷高校地歴考古学クラブ  
古家百恵・佐藤 凜・新羽坪里花・松下美桜2023「昭和42年度飯盛城跡発掘調査を振り返りこそう!!」大阪府立四條畷高校令和4年度探求チャレンジⅡ提出論文（本書第5章）  
四條畷市教育委員会編2013『飯盛山城跡測量調査報告書』  
四條畷高校地歴考古学部1965「飯盛城址の研究」『古流』第1号、四條畷高校地歴考古学クラブ  
千田嘉博2000『織豊系城郭の形成』東京大学出版会  
千田嘉博2002「戦国期拠点城郭から安土城へ」『天下統一と城』塙書房  
中井均1981「飯盛山城」『日本城郭大系第12巻』新人物往来社  
中井均1990「織豊系城郭の画期」『中世城郭研究論集』新人物往来社  
中井均2020「飯盛城の城郭史上における位置づけ」『飯盛城跡総合調査報告書』大東市教育委員会・四條畷市教育委員会  
中西裕樹1994「河内飯盛山城の構造について」『愛城研報告創刊号』愛知中世城郭研究会  
平尾兵吾1931「北河内郡史蹟史話」大阪府北河内郡教育会  
東の丸調査報告係編1968「飯盛城東の丸一の曲輪調査報告」地歴考古学クラブ  
四條畷高校76期54班 研究ノート

## 出土遺物観察表

遺物 番号	図説 番号	図版 番号	出土場所	出土・採集 年月	種類・形状	法量	図説	出土 もしくは材質	模様・色調	年代・備考
1	7	10-1	赤輪 31 2A-041	1967.12	土師器 甕	(口径) 14.4cm (反転) (底径) - (高さ) 14cm (残存) (厚み) 0.2 ~ 0.3cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設ける。	甕	(模様) 良好 (色調) 内外断: 淡黄褐色 (10R 8.4)	口縁部に煤付着。灯明土 16世紀中頃～後半
2	7	10-1	赤輪 31 1A-026	1967.12	土師器 甕	(口径) 12.0cm (反転) (底径) - (高さ) 1.5cm (残存) (厚み) 0.2 ~ 0.4cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設ける。	甕 細かな雲母を含む	(模様) 良好 (色調) 内外断: にぶい黄褐色 (10R 7/4)	口縁部に煤付着。灯明土 16世紀中頃～後半
3	7	10-1	赤輪 31 2A-007、 2A-008	1967.12	土師器 甕	(口径) 12.0cm (反転) (底径) - (高さ) 1.7cm (残存) (厚み) 0.2 ~ 0.4cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設ける。	甕 細かな雲母を含む	(模様) 良好 (色調) 内外断: にぶい黄褐色 (10R 7/3)	16世紀中頃～後半
4	7	10-1	赤輪 31 4A-008	1967.12	土師器 甕	(口径) 11.2cm (反転) (底径) - (高さ) 1.8cm (残存) (厚み) 0.2 ~ 0.4cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設ける。	甕 細かな雲母を含む	(模様) 良好 (色調) 内外断: 淡黄褐色 (10R 8/3)	口縁部に煤付着。灯明土 16世紀中頃～後半
5	7	10-1	赤輪 31 4A-025	1967.12	土師器 甕	(口径) 11.0cm (反転) (底径) - (高さ) 1.3cm (残存) (厚み) 0.3 ~ 0.6cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ	甕 細かな雲母を含む	(模様) 良好 (色調) 内外断: にぶい黄褐色 (10R 7/3)	16世紀後半～17世紀前半
6	7	10-1	赤輪 31 1A-021	1967.12	土師器 甕	(口径) 11.0cm (反転) (底径) - (高さ) 2.1cm (残存) (厚み) 0.3 ~ 0.5cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設ける。	甕 細かな雲母を含む	(模様) 良好 (色調) 内外断: にぶい黄褐色 (10R 7/3)	
7	7	10-1	赤輪 31 2A-76、2A- 77	1967.12	土師器 甕	(口径) 8.0cm (反転) (底径) - (高さ) 1.8cm (残存) (厚み) 0.3 ~ 0.4cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部外ヨコナデ	甕 細かな雲母を含む	(模様) 良好 (色調) 内外断: 淡黄褐色 (10R 8.4)	
8	7	10-1	赤輪 31 4A-081	1967.12	土師器 甕	(口径) 9.8cm (反転) (底径) - (高さ) 2.1cm (残存) (厚み) 0.3 ~ 0.5cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設ける。	甕 細かな雲母・長石 を含む	(模様) 良好 (色調) 内外断: にぶい黄褐色 (10R 7/4)、新: にぶい黄褐色 (10R 7/2)	
9	7	10-1	赤輪 31 1A-002	1967.12	土師器 甕	(口径) 9.4cm (反転) (底径) - (高さ) 1.9cm (残存) (厚み) 0.3 ~ 0.5cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部外ナデ 口縁部に若干の段を設ける。	甕	(模様) 良好 (色調) 内外断: 黄褐色 (10R 8.6)	
10	7	10-1	赤輪 31 3A-049、 4A-041、 4A-042	1967.12	土師器 甕	(口径) 9.6cm (反転) (底径) - (高さ) 1.5cm (残存) (厚み) 0.2 ~ 0.4cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ	甕 細かな雲母を含む	(模様) 良好 (色調) 内外断: 淡黄褐色 (10R 6/2)	16世紀後半～17世紀前半
11	7	10-1	赤輪 31 1B-002	1967.12	土師器 甕	(口径) 10.4cm (反転) (底径) - (高さ) 1.3cm (残存) (厚み) 0.2 ~ 0.4cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設ける。	甕 細かな雲母を含む	(模様) 良好 (色調) 内外断: 淡黄褐色 (2.5Y 8.4)	口縁部に煤付着。灯明土 16世紀～17世紀代
12	7	10-1	赤輪 31 1A-010	1967.12	土師器 甕	(口径) 11.0cm (反転) (底径) - (高さ) 2.3cm (残存) (厚み) 0.2 ~ 0.4cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設ける。	甕 細かな雲母を含む	(模様) 良好 (色調) 内外断: にぶい黄褐色 (10R 7/3)	
13	7	10-1	赤輪 31 5A-009	1967.12	土師器 甕	(口径) - (底径) - (高さ) 1.4cm (残存) (厚み) 0.3 ~ 0.4cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設ける。	甕	(模様) 良好 (色調) 内外断: 淡黄褐色 (2.5Y 7/3)	口縁部に煤付着。灯明土 16世紀中頃～後半
14	7	10-1	赤輪 31 4A-040、 4A-042、 5A-010、 5A-014	1967.12	土師器 甕	(口径) - (底径) - (高さ) 1.4cm (残存) (厚み) 0.2 ~ 0.4cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設ける。	甕 細かな雲母を含む	(模様) 良好 (色調) 内外断: 淡黄褐色 (10R 8/2)	16世紀中頃～後半
15	7	10-1	赤輪 31 5A-034	1967.12	土師器 甕	(口径) - (底径) - (高さ) 1.3cm (残存) (厚み) 0.2 ~ 0.4cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設ける。	甕 細かな雲母を含む	(模様) 良好 (色調) 内外断: 淡黄褐色 (10R 8/2)	16世紀中頃～後半
16	7	10-1	赤輪 31 5A-020	1967.12	土師器 甕	(口径) - (底径) - (高さ) 1.0cm (残存) (厚み) 0.2 ~ 0.3cm	口縁部内外面ヨコナデ 口縁部に若干の段を設ける。	甕	(模様) 良好 (色調) 内外断: 淡黄褐色 (10R 8.4)	16世紀中頃～後半
17	7	10-1	赤輪 31 5A-047	1967.12	土師器 甕	(口径) - (底径) - (高さ) 1.4cm (残存) (厚み) 0.2 ~ 0.5cm	口縁部内外面ヨコナデ	甕 細かな雲母を含む	(模様) 良好 (色調) 内外断: 淡黄褐色 (10R 8.4)	
18	7	10-1	赤輪 31 1B-004	1967.12	土師器 甕	(口径) - (底径) - (高さ) 1.5cm (残存) (厚み) 0.2 ~ 0.4cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設ける。	甕	(模様) 良好 (色調) 内外断: 淡黄褐色 (10R 8.4)	16世紀中頃～後半
19	7	10-1	赤輪 31 1B-005	1967.12	土師器 甕	(口径) - (底径) - (高さ) 1.3cm (残存) (厚み) 0.2 ~ 0.3cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設ける。	甕 細かな雲母を含む	(模様) 良好 (色調) 内外断: 淡黄褐色 (10R 8.4)	
20	7	10-2	赤輪 31 1A-060	1967.12	土師器 甕	(口径) - (底径) - (高さ) 2.0 cm (残存) (厚み) 0.4 ~ 0.6cm	体部内外面ナデ	甕 細かな雲母を含む	(模様) 良好 (色調) 外: 黄褐色 (2.5Y 3/1)、内断: にぶい黄褐色 (10R 8/2)	甕の破片と思われる。
21	7	10-2	赤輪 31 1B-026	1967.12	土師器 甕	(口径) - (底径) - (高さ) 1.5 cm (残存) (厚み) 0.2 ~ 0.4cm	体部内外面ナデ	甕 細かな雲母を含む	(模様) やや不良 (色調) 内外断: にぶい黄褐色 (7.5YR 7/4)、新: 黄褐色 (2.5Y 3/1)	16世紀中頃～17世紀前半
22	7	10-2	赤輪 31 3A-065	1967.12	土師器 甕	(口径) 1.8cm (残存) (高さ) 2.2cm (最大) (厚み) 0.3 ~ 1.1cm	体部内外面ナデ	甕 細かな雲母を含む	(模様) 良好 (色調) 内外断: 褐色 (5YR 6/6)	甕の破片と思われる。
23	7	10-2	赤輪 31 1A-009	1967.12	土師器 甕	(口径) 4.1cm (残存) (高さ) 3.0cm (最大) (厚み) 1.4cm	体部外面ナデ、内面叩き	甕 厚さ 3mm 以下の小石と細かな雲母・長石を含む	(模様) 良好 (色調) 内外断: 褐色 (7.5YR 6/6)	甕の破片と思われる。

遺物 番号	探検 番号	探検 年月	出土場所	出土・探検 年月	種類・器種	法量	図型	出土 もしくは材質	構成・色調	年代・備考
24	7	10-2	曲輪 31 2A-104	1967.12	土師器	(縦) 3.40cm (残存) (横) 3.90cm (最大) (厚み) 0.9 ~ 1.0cm	体部内外面ナテ	密 微細な長石を含む	(構成) 良好 (色調) 内外赤; にぶい黄褐色 (10BR 7/6)	体部表面に把手または足環の痕跡と思われる刻線がある。
25	7	10-2	曲輪 31 2A-121	1967.12	土師器	(縦) 4.00cm (残存) (横) 5.70cm (最大) (厚み) 0.9 ~ 1.0cm	体部内外面ナテ	密 微細な黄褐色・長石を含む	(構成) 良好 (色調) 内外赤; 黄褐色 (10BR 7/2)	蓋の破片と思われる。
26	7	10-2	曲輪 31 5A-024	1967.12	土師器	(縦) 3.10cm (残存) (横) 2.60cm (最大) (厚み) 0.4 ~ 0.6cm	体部内外面ナテ	密 微細な黄褐色・黒石を含む	(構成) 良好 (色調) 内外赤; 褐色 (5YR 6/3)	小型蓋の破片と思われる。
27	7	10-2	曲輪 31 1A-016	1967.12	土師器	(縦) 3.80cm (残存) (横) 3.50cm (最大) (厚み) 0.8cm	体部内外面ナテ	密 微細な黄褐色・長石を含む	(構成) 良好 (色調) 内外赤; 褐色 (5YR 5/2), 赤・黄褐色 (5YR 7/2)	蓋の破片と思われる。
28	7	10-2	曲輪 31 1A-077	1967.12	土師器	(縦) 4.00cm (残存) (横) 3.60cm (最大) (厚み) 0.6 ~ 0.9cm	体部内外面ナテ	密 微細な黄褐色を含む	(構成) 良好 (色調) 内外赤; にぶい黄褐色 (10BR 3/2), 赤; 黄褐色 (10BR 7/6)	蓋の破片と思われる。
29	7	10-2	曲輪 31 4A-023, 5A-027	1967.12	土師器	(縦) 10.00cm (残存) (横) 5.20cm (最大) (厚み) 0.6 ~ 0.9cm	体部内外面ナテ	密 微細な黄褐色・長石を含む	(構成) 良好 (色調) 内外赤; にぶい黄褐色 (10BR 7/2)	蓋の破片と思われる。
30	7	10-2	曲輪 31 4A-026	1967.12	不明土器	(口径) — (底径) — (高さ) 1.3 ~ 1.4cm (残存) (厚み) 0.5 ~ 0.7cm	—	密 微細な黄褐色を含む	(構成) 良好 (色調) 内外赤; 褐色 (7.5Y 2/1)	黄色土器の高台か、2/1)
31	8	曲輪 31 2A-110	2-2	1967.12	黄銅器 白銅器	(口径) 14.00cm (反転) (底径) — (高さ) 1.80cm (残存) (厚み) 0.2 ~ 0.30cm	—	密	(構成) 良好 (色調) 内外赤; 灰白色 (5Y 8/2), 赤; 灰白色 (7.5Y 8/1)	12世紀代
32	8	曲輪 31 2A-086	2-2	1967.12	銅器 天目茶碗	(縦) 1.90cm (残存) (横) 2.40cm (最大) (厚み) 0.5 ~ 0.6cm	—	密	(構成) 良好 (色調) 内外赤; 赤褐色 (10R 2/1), 黒鉛; 緑灰色 (7.5R 3/1), 赤; にぶい黄褐色 (10BR 7/4)	瀬戸・美濃黄銅
33	8	11-1	曲輪 31 2A-109	1967.12	銅器	(縦) 3.20cm (残存) (横) 2.90cm (最大) (厚み) 0.8 ~ 0.9cm	—	密	(構成) 良好 (色調) 外輪紫色; 緑赤褐色 (2.5YR 3/2), 内輪; 灰白色 (10BR 8/2)	
34	8	11-1	曲輪 31 5A-036	1967.12	瓦質土器 罐鉢	(口径) 25.00cm (反転) (底径) — (高さ) 3.60cm (残存) (厚み) 0.4 ~ 0.8cm	口縁部内外面ヨコナテ 体部外面ヨコハケが残る。	密	(構成) 良好 (色調) 内外赤; 灰白色 (10Y 4/2), 赤; 灰白色 (10BR 8/2)	16世紀中頃〜後半
35	8	11-1	曲輪 31 1B-007	1967.12	瓦質土器 罐鉢	(口径) — (底径) — (高さ) 3.90cm (残存) (厚み) 0.6 ~ 0.8cm	口縁部内外面ヨコナテ 体部外面ナテ	密 微細な黄褐色・長石を含む	(構成) 不良 (色調) 内輪; 灰白色 (2.5Y 7/2), 外; 黄褐色 (2.5Y 6/1)	16世紀末〜17世紀初頃
36	8	11-1	曲輪 31 2A-118	1967.12	瓦質土器	(縦) 4.70cm (残存) (横) 5.50cm (最大) (厚み) 1.1 ~ 1.5cm	体部内外面ナテ	密 微細な黄褐色・長石を含む	(構成) 良好 (色調) 内外赤; 5Y 4/1), 赤; 灰白色 (2.5Y 8/2)	溝孔の痕跡があることから、灰砂の破片と思われる。
37	8	11-1	曲輪 31 3A-027	1967.12	瓦質土器	(縦) 3.50cm (残存) (横) 3.10cm (最大) (厚み) 0.6 ~ 1.0cm	体部内外面ナテ	密	(構成) 良好 (色調) 内外赤; 緑灰色 (5Y 3/1), 赤; 黄褐色 (10BR 6/4)	口縁部下部に菊花文のスタンプを残す。 透鉢の破片と思われる。
38	8	11-1	曲輪 31 3A-062	1967.12	瓦質土器	(口径) — (底径) — (高さ) 3.90cm (残存) (厚み) 0.8 ~ 0.9cm	体部内外面ナテ	密	(構成) 良好 (色調) 内外赤; 灰白色 (5Y 4/1), 赤; 黄褐色 (10BR 6/4)	透鉢の破片と思われる。
39	8	11-1	曲輪 31 1A-078	1967.12	瓦質土器	(口径) — (底径) — (高さ) 1.50cm (残存) (厚み) 0.8 ~ 0.9cm	体部内外面ナテ	密 微細な黄褐色を含む	(構成) 良好 (色調) 外; 灰白色 (5Y 5/1), 内輪; にぶい黄褐色 (10BR 7/2)	透鉢の破片と思われる。
40	8	11-1	曲輪 31 1A-081	1967.12	瓦質土器	(口径) — (底径) — (高さ) 1.10cm (残存) (厚み) 0.8 ~ 1.0cm	体部内外面ナテ	密 微細な黄褐色・長石を含む	(構成) 良好 (色調) 内外赤; にぶい黄褐色 (10BR 6/2)	透鉢の破片と思われる。
41	8	11-1	曲輪 31 4A-1 ~ 5A	1967.12	瓦質土器	(縦) 6.50cm (残存) (横) 6.80cm (最大) (厚み) 1.0cm	体部内面の上部ヨコハケ、下部ナテ	密	(構成) 良好 (色調) 内外赤; 灰白色 (5Y 5/1), 赤; 灰白色 (5Y 8/2)	蓋の破片と思われる。
42	8	11-1	曲輪 31 1A-006	1967.12	土師器	(縦) 4.10cm (残存) (横) 5.00cm (最大) (厚み) 1.20cm	体部外面ナテ、内面ヨコハケ	密 微細な黄褐色・長石を含む	(構成) 良好 (色調) 内; 黄褐色 (2.5Y 3/1), 外; 黄褐色 (2.5Y 6/1), 赤; 灰白色 (2.5Y 8/2)	蓋の破片と思われる。
43	8	11-1	曲輪 31 3A-011	1967.12	瓦質土器	(縦) 5.40cm (残存) (横) 3.10cm (最大) (厚み) 0.9 ~ 1.1cm	体部内外面ナテ	密 微細な黄褐色・長石を含む	(構成) 良好 (色調) 内外赤; 灰白色 (5Y 6/1), 赤; 灰白色 (5Y 7/2)	
44	8	11-1	曲輪 31 3A-040	1967.12	瓦質土器	(縦) 3.40cm (残存) (横) 4.80cm (最大) (厚み) 0.9cm	体部内外面ナテ	密 微細な黄褐色・長石を含む	(構成) 良好 (色調) 内外赤; 灰白色 (5Y 6/1), 赤; 灰白色 (5Y 7/2)	
45	8	11-1	曲輪 31 2A-123	1967.12	石製品 磁石	(縦) 2.10cm (残存) (横) 2.10cm (最大) (厚み) 0.30cm	—	—	—	—
46	8	曲輪 31 2-2	3A-033	1967.12	石製品 磁石	(縦) 1.90cm (残存) (横) 1.40cm (最大) (厚み) 0.50cm	—	—	—	表面に砥点状の遺痕あり。
47	8	曲輪 31 2-2	4A-066	1967.12	石製品 磁石	(縦) 2.20cm (残存) (横) 1.60cm (最大) (厚み) 0.60cm	—	—	—	—
48	9	11-2	曲輪 31 2A-119	1967.12	鉄製品 釘	(長さ) 4.60cm (残存) (断面幅) 0.60cm (断面厚) 0.60cm	—	—	—	普通釘 (断面: 1.7 × 0.40cmの台形)

遺物番号	図録番号	出土場所	出土・採集年月	種別・器種	法量	図型	出土もしくは材質	焼成・色調	年代・備考		
49	9	11-2	遺輪 31 2A-014	1967. 12	鉄製品 釘	(長さ) 4.2cm (残存) (断面幅) 0.4cm (断面厚) 0.5cm	—	—	—	春縄鉄 (断面) 1.3 × 0.4cm の台形)	
50	9	11-2	遺輪 31 2A-053	1967. 12	鉄製品 釘	(長さ) 3.9cm (残存) (断面幅) 0.4cm (断面厚) 0.4cm	—	—	—	春縄鉄 (断面) 0.6 × 0.3cm の台形)	
51	9	11-2	遺輪 31 2A-107	1967. 12	鉄製品 釘	(長さ) 4.8cm (残存) (断面幅) 0.6cm (断面厚) 0.3cm	—	—	—	春縄鉄 (断面) 1.2 × 0.2cm の台形)	
52	9	11-2	遺輪 31 2A-052	1967. 12	鉄製品 釘	(長さ) 4.3cm (残存) (断面幅) 0.4cm (断面厚) 0.3cm	—	—	—	先端部分	
53	9	11-2	遺輪 31 2A-055	1967. 12	鉄製品 釘	(長さ) 1.7cm (残存) (断面幅) 0.3cm (断面厚) 0.3cm	—	—	—	先端付近部分	
54	9	11-2	遺輪 31 2A-054	1967. 12	鉄製品 釘	(長さ) 2.7cm (残存) (断面幅) 0.3cm (断面厚) 0.3cm	—	—	—	先端部分	
55	9	11-2	遺輪 31 2A-056	1967. 12	板状鉄製品	(縦) 5.0cm (残存) (横) 2.8cm (最大) (厚み) 0.1 ~ 0.4cm	—	—	—	表面あるいは刀痕の一部が。	
56	9	11-2	遺輪 31 2A	1967. 12	不明鉄製品	(長さ) 17.8cm (直径) 0.4cm	針金状であるが、一端が 鋭く尖っている。	—	—	—	年代は検討が必要。
57	9	11-2	遺輪 31 2A	1967. 12	不明鉄製品	(長さ) 23.5cm (直径) 0.4cm	針金状であるが、一端が 鋭く尖っている。	—	—	—	年代は検討が必要。
58	9	11-2	遺輪 31 4A-1 ~ 3A	1967. 12	銅製品 鍔首・鍔	(長さ) 5.7cm (穴距離) 1.7cm (首径深) 1.0cm (首径深) 0.1cm	延べ板をしばり、丸め、 ろう付けして製作	—	—	—	火皿部は厚さにより変形、 一部欠損。 鍔部の内部にうづの残片あり。 16世紀代
59	9	他類	遺輪 31 2-2	1967. 12	板状鉄製品	(長さ) 1.5cm (断面幅) 0.8cm (厚み) 0.05cm	延べ板をしばり、丸め、 ろう付けして製作	—	—	—	表面に鍔金の痕跡あり。
60	10	12-1	遺輪 31	1967. 5	土師器 皿	(口径) 9.4cm (反転) (底径) — (高さ) 0.9cm (残存) (厚み) 0.2 ~ 0.4cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設け る。	青 —	(焼成) 良好 (色調) 内外断: 淡黄褐色 (10R 8/2)	16世紀中頃～後半	
61	10	12-1	遺輪 31	1967. 5	土師器 皿	(口径) 9.6cm (反転) (底径) — (高さ) 0.9cm (残存) (厚み) 0.3 ~ 0.5cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設け る。	青 黒褐色変色母・黄色 粘土を含む	(焼成) 良好 (色調) 内外断: 淡黄褐色 (10R 8/2)	16世紀中頃～後半	
62	10	12-1	遺輪 31	1967. 5	土師器 皿	(口径) 9.6cm (反転) (底径) — (高さ) 1.9cm (残存) (厚み) 0.3 ~ 0.5cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設け る。	青 黒褐色変色母・黄色 粘土を含む	(焼成) 良好 (色調) 内外断: 淡黄褐色 (10R 8/2)	16世紀中頃～後半	
63	10	12-1	遺輪 31	1967. 5	土師器 皿	(口径) 9.8cm (反転) (底径) — (高さ) 1.5cm (残存) (厚み) 0.3 ~ 0.4cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設け る。	青 黒褐色変色母を含む	(焼成) 良好 (色調) 内外断: 淡黄褐色 (10R 8/2)	口縁部に埋付片。灯籠土 16世紀後半～17世紀前半	
64	10	12-1	遺輪 31	1967. 5	土師器 皿	(口径) 10.4cm (反転) (底径) — (高さ) 1.8cm (残存) (厚み) 0.2 ~ 0.5cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設け る。	青 黒褐色変色母・黄色 粘土を含む	(焼成) 良好 (色調) 内外断: 淡黄褐色 (10R 8/2)	16世紀中頃～後半	
65	10	12-1	遺輪 31	1967. 5	瓦質土器	(縦) 2.6cm (残存) (横) 1.9cm (最大) (厚み) 1.0 ~ 1.2cm	体部内外面ナデ	青	(焼成) 不良 (色調) 内外: 灰白色 (10R 3/2)、断: 黄褐色 (2.5Y 3/1)	鉢の破片と思われる。	
66	10	12-1	遺輪 31	1967. 5	瓦質土器	(縦) 5.9cm (残存) (横) 6.4cm (最大) (厚み) 0.9 ~ 1.4cm	体部内外面ナデ	青	(焼成) 良好 (色調) 内外: 灰色 (5Y 5/1)、断: 灰白色 (7.5Y 8/1)	鉢の破片と思われる。	
67	10	12-1	遺輪 31	1967. 5	瓦質土器	(縦) 6.9cm (残存) (横) 9.3cm (最大) (厚み) 1.2cm	体部内外面ナデ	青	(焼成) 良好 (色調) 内外: 灰色 (5Y 5/1)、断: 灰白色 (7.5Y 8/1)	鉢の破片と思われる。	
68	10	12-1	遺輪 31	1967. 5	不明土製品	(縦) 3.1cm (残存) (横) 2.2cm (最大) (厚み) 0.4cm	体部外ナデ、内部に木 本系繊維物と思われる痕跡 あり。	青	(焼成) 不良 (色調) 内外断: 灰白色 (2.5Y 8/2)	板状製品の破片と思われる。	
69	10	他類	遺輪 31 2-2	1967. 5	円形木製品	(直径) 1.8cm (厚み) 0.5cm	断面中央に1個とそれを 取りまくように5個の穴 を縦線状に開けている。 全面に黒染を塗っている と思われる。	—	—	—	盤状の物と思われる。
70	10	12-1	遺輪 31	1967. 5	石製品 砥石	(縦) 4.0cm (残存) (横) 2.3cm (最大) (厚み) 0.4 ~ 0.9cm	—	—	—	—	
71	10	他類	遺輪 31 2-2	1967. 5	銅製品 刀道具 目録	(縦) 4.4cm (横) 1.7cm (厚み) 0.1 ~ 0.3cm (重さ) 5.9g	断面中央に目録と思われ る欠損痕あり。	—	—	—	表面に小さな金糸が見られ、 鍔金の痕跡の可能性がある。 目録と一体に製作されたも の。
72	10	12-1	遺輪 31	1967. 5	鉄製品 釘	(縦) 4.9cm (残存) (横) 1.9cm (最大)	—	—	—	—	5本の鉄釘が積重なして いる。裏の状態で遺棄された可 能性あり。
73	10	12-2	V字 深鉢 遺輪 59	1967. 5	土師器 皿	(口径) 11.8cm (反転) (底径) — (高さ) 1.7cm (残存) (厚み) 0.3 ~ 0.6cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設け る。	青 黒褐色変色母・黄色 粘土を含む	(焼成) 良好 (色調) 内外断: 淡黄褐色 (2.5Y 7/2)、断: 灰白色 (7.5Y 6/2)、断: 黄褐色 (10R 6/1)	16世紀後半～17世紀前半	

遺物番号	図録番号	出土場所	出土・採集年月	種類・器種	法量	図型	出土もしくは材質	構成・色調	年代・備考
74	10-2	V野(御体深野)曲輪 59	1967.5	土師器 皿	(口徑) 10.8cm (反転) (底径) — (器高) 1.2cm (残存) (厚み) 0.2~0.4cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設ける。	密	(構成) 良好 (色調) 内: にぶい黄褐色 (109R 6.4), 外: にぶい黄褐色 (109R 5.4), 筋: 灰褐色 (109R 5.2)	16世紀~17世紀代
75	10-2	V野(御体深野)曲輪 59	1967.5	土師器 皿	(口徑) 10.0cm (反転) (底径) — (器高) 1.6cm (残存) (厚み) 0.3~0.5cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ	密 陶細な黄褐色を含む	(構成) 良好 (色調) 内: 外: 筋: にぶい黄褐色 (109R 6.4)	
76	10-2	V野(御体深野)曲輪 59	1967.5	土師器 皿	(口徑) 9.8cm (反転) (底径) — (器高) 1.6cm (残存) (厚み) 0.3~0.5cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ナデ 口縁部に若干の段を設ける。	密 陶細な黄褐色を含む	(構成) 良好 (色調) 内: 明黄褐色 (109R 7.6), 外: にぶい黄褐色 (109R 5.4), 筋: にぶい黄褐色 (109R 6.4)	口縁部に條付筋。灯明土
77	—	V野(御体深野)曲輪 59	2019.9	火焼筋の磚丸	(直径) 1.3cm (重さ) 10.3g	互型による積遺構あり	—	—	割裂と思われる。 四條市教育委員会蔵
78	特選 2-2	曲輪 31	1966.12	銅製品 刀装具 切刃	(幅) 4.1cm (長) 2.3cm (最大) (厚み) 0.3cm (重さ) 13.8g	—	—	—	断面に鑿文の痕跡がある。
79	特選 2-2	曲輪 31	1966.9	銅鏡	(直径) 2.4cm (厚み) 0.2cm (重さ) 2.9g	—	—	—	光背透輝。1078年初録。北米録。
80	10-2	部盛城跡	—	瓦葺陶器 大甕	(幅) 18.8cm (最大) (長) 16.3cm (最大) (厚み) 1.2~1.8cm	体部内面ナデ	密 直径5mm以下の小石を含む	(構成) 良好 (色調) 内: にぶい赤褐色 (59R 5.3), 外: 緑褐色 (59R 3.3), 筋: 暗灰色 (7.59R 6.1)	常陸 1550~1600年 『磐道山』とフェルトペン迹記あり
81	11-13	部盛城跡	—	丸瓦	(長さ) 9.9cm (残存) (幅) 9.0cm (残存) (厚み) 2.4cm (最大)	凸面: ヘラケズリ・ナデ 凹面: 布目直	密 直径3mm以下の小石と陶細な黄褐色の子・長石を含む	(構成) 良好 (色調) 凸面: 灰色 (6.5), 凹面: 灰白色 (7.5Y 7/1)	『磐道山』とフェルトペン迹記あり
82	11-13	部盛城跡	—	丸瓦	(長さ) 10.4cm (残存) (幅) 8.0cm (残存) (厚み) 2.3cm (最大)	凸面: ヘラケズリ・ナデ 凹面: 布目直	密 陶細な長石を含む	(構成) 良好 (色調) 凸面: 灰色 (6.4), 凹面: 灰白色 (7.5Y 8/1)	
83	11-13	部盛城跡	—	丸瓦	(長さ) 7.7cm (残存) (幅) 6.0cm (残存) (厚み) 2.9cm (最大)	凸面: ヘラケズリ・ナデ 凹面: 布目直	密 陶細な長石を含む	(構成) 不良 (色調) 凸面: 灰色 (7.5Y 7/2)	
84	11-14	部盛城跡	—	埴	(長さ) 10.2cm (残存) (幅) 9.6cm (残存) (厚み) 2.4cm (最大)	表: ナデ 裏: ナデ	密 陶細な黄褐色・長石を含む	(構成) やや不良 (色調) 表: 黄灰色 (2.5Y 6/1), 裏: 灰色 (にぶい黄褐色) (109R 7/2)	
85	11-14	部盛城跡	—	埴	(長さ) 10.4cm (残存) (幅) 10.2cm (残存) (厚み) 2.3cm (最大)	表: ナデ 裏: ナデ	密 陶細な黄褐色・長石を含む	(構成) 良好 (色調) 表裏: オリーブ黒色 (10Y 3/1), 筋: 灰白色 (10Y 6/1)	
86	11-14	部盛城跡	—	埴	(長さ) 12.1cm (残存) (幅) 9.3cm (残存) (厚み) 2.3cm (最大)	表: ナデ 裏: ナデ	密 陶細な黄褐色・長石を含む	(構成) やや不良 (色調) 表裏: 黄灰色 (2.5Y 6/1), 筋: にぶい黄褐色 (109R 7/2)	コビキA層?
87	11-15	V野(御体深野)曲輪 59	1967.12	埴	(長さ) 10.5cm (残存) (幅) 7.4cm (残存) (厚み) 2.4cm (最大)	表: ナデ 裏: ナデ	密 陶細な黄褐色・長石を含む	(構成) 良好 (色調) 表裏: オリーブ黒色 (7.5Y 3/1), 筋: 淡黄褐色 (2.5Y 7/2)	部盛城跡 542 発掘資料 『御体深野方の瓦 12/21』 ラベルあり
88	11-15	部盛城跡	—	埴	(長さ) 9.2cm (残存) (幅) 5.8cm (残存) (厚み) 2.2cm (最大)	表: ナデ 裏: ナデ	密 陶細な黄褐色・長石を含む	(構成) やや不良 (色調) 表裏: 灰色 (にぶい黄褐色) (59R 7/4)	コビキA層?
89	11-15	部盛城跡	—	埴	(長さ) 10.5cm (残存) (幅) 7.4cm (残存) (厚み) 2.4cm (最大)	表: ナデ 裏: ナデ	密 陶細な黄褐色・長石を含む	(構成) 良好 (色調) 表裏: 灰色 (6), 筋: 灰白色 (7.5Y 8/1)	
90	12-16	高野神社(宇宮町)	—	平瓦	(長さ) 11.8cm (残存) (幅) 10.2cm (残存) (厚み) 2.1cm (最大)	凹面: 布目直 凸面: 菱形切	やや中 直径3mm以下の長石を含む	(構成) やや不良 (色調) 凹面: 灰白色 (2.5Y 7/1)	『高野神社』と華書き注記あり
91	12-16	高野神社(宇宮町)	—	平瓦	(長さ) 9.3cm (残存) (幅) 12.1cm (残存) (厚み) 1.8cm (最大)	凹面: ナデ、一部にコビキA層 凸面: ナデ	やや中 直径3mm以下の長石を含む	(構成) 良好 (色調) 凹面: 灰色 (6.5)	『高野神社』と華書き注記あり
92	12-16	高野神社(宇宮町)	—	平瓦	(長さ) 12.4cm (残存) (幅) 12.4cm (残存) (厚み) 1.7cm (最大)	凹面: ヘラケズリ 凸面: 菱形切	やや中 直径3mm以下の長石を含む	(構成) やや不良 (色調) 凹面: 灰褐色 (2.5Y 7/2)	『高野神社』と華書き注記あり
93	12-16	高野神社(宇宮町)	—	平瓦	(長さ) 11.8cm (残存) (幅) 11.0cm (残存) (厚み) 2.2cm (最大)	凹面: ナデ 凸面: 菱形切	やや中 直径3mm以下の長石を含む	(構成) やや不良 (色調) 凹面: 灰褐色 (2.5Y 7/2)	『高野神社』と華書き注記あり
94	12-16	高野神社(宇宮町)	—	平瓦	(長さ) 10.8cm (残存) (幅) 12.6cm (残存) (厚み) 2.0cm (最大)	凸面: 菱形切 凹面: ナデ	やや中 直径3mm以下の長石を含む	(構成) やや不良 (色調) 凸面: 灰褐色 (2.5Y 7/2)	『高野神社』と華書き注記あり
95	— 11-2	曲輪 31 1A-019	1967.12	シジミ科	(長さ) 1.6cm (幅) 1.6cm (残存)	—	—	—	左
96	— 11-2	曲輪 31 1A-045	1967.12	シジミ科	(長さ) 1.5cm (残存) (幅) 1.9cm (残存)	—	—	—	右
97	— 11-2	曲輪 31 3A-番外	1967.12	シジミ科	(長さ) 2.3cm (幅) 2.5cm	—	—	—	右
98	— 12-2	V野(御体深野)曲輪 59	1967.5	マルスダレガイ科?	(長さ) 1.4cm (残存) (幅) 4.6cm (残存)	—	—	—	部盛城跡の一部のみ残る。長石不明



## 参考文献

- 後川忠太郎・實盛良彦・井上智博編 2015『讀良郡糸里遺跡』四條崎市教育委員会・寝屋川市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター。
- 阿部幸一 1999『屢屋遺跡発掘調査概要』IV、大阪府教育委員会。
- 井上智博・多賀晴司編 2003『讀良郡糸里遺跡』その2、財団法人大阪府文化財センター。
- 井上智博編 2008『讀良郡糸里遺跡』VI、財団法人大阪府文化財センター。
- 岩瀬 透・藤田道子・宮崎幸史・藤永正明編 2010『部屋北遺跡』I、大阪府教育委員会。
- 岩瀬 透編 2012『部屋北遺跡』II、大阪府教育委員会。
- 梅原末治 1937『河内四條崎村忍岡古墳』『日本古文化研究所報告』第4、日本古文化研究所。
- 梅原末治 1985『銅鐸の研究』木耳社。
- 大阪府教育委員会編 1970『先条町、正法寺跡発掘調査概報』大阪府教育委員会。
- 片山長三 1967a『枚方台地の先土器時代遺跡』『枚方市史』第一巻、枚方市役所。
- 片山長三 1967b『縄文時代遺跡』『枚方市史』第一巻、枚方市役所。
- 鎌方正樹 2003b『井戸の考古学』同成社。
- 川西宏幸 1978『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』第64巻第2号、日本考古学会。
- 黒田 淳 1989『飯盛山城跡の調査』『大東市埋蔵文化財発掘調査概報』1988年度、大東市教育委員会。
- 黒田 淳 2013『飯盛山城遺跡測量調査報告書』大東市教育委員会。
- 古代の土器研究会編 1992『都城の土器集成』古代の土器研究会。
- 古代の土器研究会編 1993『都城の土器集成』II、古代の土器研究会。
- 近藤章子・山本雅和・多賀晴司編 2006『讀良郡糸里遺跡』IV、財団法人大阪府文化財センター。
- 佐伯博光・六辻香香編 2007『讀良郡糸里遺跡』V、財団法人大阪府文化財センター。
- 櫻井敬夫 1972『考古学』『四條崎市史』第1巻、四條崎市役所。
- 櫻井敬夫 1977『暇の歴史・暇の文化財』四條崎市・四條崎市教育委員会。
- 櫻井敬夫・佐野喜美・野島絵 2006『こども歴史 わたしたちの四條崎』四條崎市教育委員会。
- 櫻井敬夫・佐野喜美・野島絵 2010『歴史とみどりのまち ふるさと四條崎』四條崎市教育委員会。
- 四條崎市教育委員会編 2002『みどりの風と古墳』第17回特別展、四條崎市立歴史民俗資料館。
- 四條崎市教育委員会編 2004『馬と生きる』開館20周年記念特別展、四條崎市立歴史民俗資料館。
- 四條崎市教育委員会編 2008『ひとつふの橋』第23回特別展、四條崎市立歴史民俗資料館。
- 四條崎市立歴史民俗資料館編 2016『四條崎市史』第5巻考古編、四條崎市。
- 四條崎市立歴史民俗資料館編 1990『はるかなる日々—四條崎の史跡—文化財—』四條崎市・四條崎市教育委員会。
- 瀬川芳則 1992『最古の木製下駄』『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズV、同刊行会。
- 大東市教育委員会編 四條崎市教育委員会 2013『飯盛城跡縄文測量図』大東市教育委員会・四條崎市教育委員会。
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店。
- 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社。
- 辻本 武 1987『屢屋遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会。
- 寺沢 薫・森岡秀人編 1989『弥生土器の様式と編年』近畿編I、木耳社。
- 中尾智行・山根 航編 2009『讀良郡糸里遺跡』VII、財団法人大阪府文化財センター。
- 中村 浩 2001『和泉陶器窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版。
- 西尾 宏 1987『中野遺跡発掘調査概要』IV、四條崎市教育委員会。
- 西尾 宏 1988『中野遺跡発掘調査概要』V、四條崎市教育委員会。
- 野島 絵 1977『四條崎市中野遺跡』『まんだ』第2号、まんだ編集部。
- 野島 絵 1978a『中野遺跡発掘調査概要』I、四條崎市教育委員会。
- 野島 絵 1978b『南山下遺跡』『まんだ』第5号、まんだ編集部。
- 野島 絵 1978c『大阪府四條崎町発見の製塩土器』『古代学研究』第86号、古代学研究会。
- 野島 絵 1979a『岡山南遺跡出土の古代下駄』『まんだ』第8号、まんだ編集部。
- 野島 絵 1979b『大阪府下における製塩土器出土遺跡』『ヒストリア』第82号、大阪歴史学会。
- 野島 絵 1980a『清滝古墳群発掘調査概要』四條崎市文化財研究所調査会。
- 野島 絵 1980b『四條崎町奈良井遺跡(2)』『まんだ』第9号、まんだ編集部。
- 野島 絵 1980c『四條崎町奈良井遺跡』『まんだ』第9号、まんだ編集部。
- 野島 絵 1981『更良岡山古墳群発掘調査概要』四條崎市教育委員会。
- 野島 絵 1982『岡山南遺跡発掘調査概要』II、四條崎市教育委員会。
- 野島 絵 1983『忍ヶ丘駅前遺跡発掘調査概要』II、四條崎市教育委員会。
- 野島 絵 1984a『屢屋遺跡発掘調査概要』I、四條崎市教育委員会。
- 野島 絵 1984b『河内の馬飼』『万葉集の考古学』筑摩書房。
- 野島 絵 1985『四條崎町南野米崎遺跡』『まんだ』第24号、まんだ編集部。
- 野島 絵 1986a『四條崎市埋蔵文化財発掘調査概要—1985年度—』四條崎市教育委員会。
- 野島 絵 1986b『中野遺跡発掘調査概要』III、四條崎市教育委員会。
- 野島 絵 1987a『屢屋遺跡』四條崎市教育委員会。
- 野島 絵 1987b『岡山南遺跡発掘調査概要』IV、四條崎市教育委員会。
- 野島 絵 1987c『四條崎町、南山下遺跡出土の馬形埴輪』『まんだ』第30号、まんだ編集部。
- 野島 絵 1987d『四條崎町南山下遺跡』『まんだ』第30号、まんだ編集部。
- 野島 絵 1987e『南野米崎遺跡』『韓式系土器研究』I、韓式系土器研究会。
- 野島 絵 1988『四條崎町“南山下遺跡”』『まんだ』第35号、まんだ編集部。
- 野島 絵 1990『四條崎市・中野遺跡』『まんだ』第39号、まんだ編集部。

- 野島 稔 1991「南野米崎遺跡」『韓式系土器研究』Ⅲ、韓式系土器研究会。
- 野島 稔 1992「四條畷市・大上遺跡」『まんだ』第47号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1993a「四條畷市忍ヶ丘駅前遺跡」『まんだ』第49号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1993b「四條畷市鎌田遺跡(一)」『まんだ』第50号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1994a「雁屋遺跡発掘調査概要－四條畷市江瀬美町所在－」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1994b「四條畷市鎌田遺跡(二)」『まんだ』第51号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1994c「四條畷市・四條畷小学校内遺跡」『まんだ』第53号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1995「南野遺跡発掘調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1996a「四條畷市坪井遺跡」『まんだ』第57号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1996b「鍛冶工房のある風景」『まんだ』第58号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1997a「五枝の呼」『まんだ』第60号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1997b「四條畷市更良岡山遺跡(一)」『まんだ』第62号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1997c「はにわはともだち」第12回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
- 野島 稔 1999「四條畷市大上古墳群」『まんだ』第66号、まんだ編集部。
- 野島 稔 編 2000「更良岡山遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 2006「四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 2008「王権を支えた馬」『牧の考古学』高志書院。
- 野島 稔 2009「河内湖東岸における古墳と古代豪族の動向」『北河内の古墳』財団法人交野市文化財事業団。
- 野島 稔・藤原忠雄・花田照也 1976「岡山南遺跡発掘調査概要」Ⅰ、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・藤原忠雄・花田照也 1977「正法寺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・前田 暢 1984「岡山南遺跡・中野遺跡発掘調査概要」Ⅲ、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始 1999「正法寺跡・大上遺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始 2000「奈良田遺跡・奈良井遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始 2001「南山下遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始 2002「正法寺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始・實盛良彦 2012「奈良井遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 原田昌則・尾崎良史 2014「考古資料からみる八尾の歴史」公益財団法人八尾市文化財調査研究会。
- 平尾兵吾 1928「北河内郡」『大阪府史蹟名勝天然記念物』第三冊、大阪府学務部。
- 平尾兵吾 1931「北河内郡史蹟史話」北河内郡教育会(1973年増補再刊)。
- 松岡良恵 1987「中野遺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 宮崎泰史・藤永正明編 2006「年代のさし」大阪府立近つ飛鳥博物館。
- 宮野淳一 1992「更良岡山遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会。
- 三好 玄・杉本典典・野島 稔・澤澤芳樹 2007「弥生時代後期潤洲溝遺構に伴う土器群」『大阪歴史博物館研究紀要』第6号、財団法人大阪市文化財協会。
- 村上 始 1997a「木間池北方遺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 村上 始 1997b「忍ヶ丘駅前遺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 村上 始 2000「四條畷小学校内遺跡・中野遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始 2001a「正法寺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始 2001b「南山下遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始 2001c「大阪府鎌田遺跡の調査速報」『月刊考古学ジャーナル』No.470、ニュー・サイエンス社。
- 村上 始 2001d「四條畷市鎌田遺跡」『まんだ』第71号、まんだ編集部。
- 村上 始 2001e「大阪府鎌田遺跡の調査速報」『祭祀考古』第21号、祭祀考古学会。
- 村上 始 2001f「四條畷市雁屋遺跡」『まんだ』第73号、まんだ編集部。
- 村上 始 2003a「奈良井遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始 2003b「大阪・中野遺跡」『木簡研究』第25号、木簡学会。
- 村上 始 2004「四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始 2006「一般国道163号の拡幅工事に伴う発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦 2011「雁屋遺跡の発掘調査」『近畿弥生の会第14回集会京都場所発表要旨集』近畿弥生の会。
- 村上 始・實盛良彦 2013a「中野遺跡・奈良井遺跡・南山下遺跡・岡山南遺跡発掘調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦 2013b「北口遺跡・浪良郡糸里遺跡発掘調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦 2014「四條畷市文化財調査年報」第1号、四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦 2016「四條畷市文化財調査年報」第3号、四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦 2018「四條畷市文化財調査年報」第5号、中野遺跡、四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦 2019「四條畷市文化財調査年報」第6号、中野遺跡2、四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦 2021「四條畷市文化財調査年報」第8号、中野遺跡3(墓ノ堂古墳)、四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦編 2013「飯盛山城跡測量調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦編 2017「四條畷市文化財調査年報」第4号、大上遺跡(大上古墳群)、四條畷市教育委員会。
- 山口 博 1968「四條畷町の歴史」。
- 山口 博編 1972「四條畷市史」第1巻、四條畷市役所。
- 山口 博 1990「四條畷市史」第4巻、四條畷市役所。
- 李 聖子編 2020「飯盛城跡総合調査報告書」大東市教育委員会・四條畷市教育委員会。

付編 1 『飯盛城東の丸一の曲輪調査報告』(昭和43年11月、原版B5版を3/5(60%)に縮小)

琵琶湖資料センター

飯盛城東の丸  
一の曲輪  
調査報告



飯盛城

琵琶湖資料センター

発行所、琵琶湖文化出版会、京都府京都市

昭和43年11月30日発行  
編集 琵琶湖文化出版会  
(京都府京都市中京区)  
発行 琵琶湖文化出版会





中心

150

200

1	+	1
8	5	2
7	6	3

85634

3 6 2 5 7

46	42	38	34	30	26	24
41	43	37	33	31	23	23
48	44	40	36	32	28	24
47	45	41	37	33	27	27

15	8	1
16	7	2
17	10	3
18	11	4
19	12	5
20	13	6
21	14	7

調査日誌

12月17日(日) 曇り

[発掘参加者] 3井 山本、種谷、2年大西、花井  
1年野間、北に安保、吉川、若田  
時中、花井、たのめ、 (10名)

[発掘地域] 1-A 2-A 1-B

[出土物] 1-A 59~82 2-A 1~10  
1-B 1~26

12月25日(水) (14日は雨天のため中止)

[発掘時間] 11:00 ~ 4:00

[発掘参加者] 1年大西、花井、山本、大台、藤子  
1年野間、神林、国友、西垣、八木

[発掘地域] 3-A 4-A 5-A

[出土状態] 3-A 1~59, 4-A 1~59  
5-A 1~1, 1-B 27~28, 2-A 1片

[備考] 東ノ上石垣 高さ2.50m 幅6.70m  
石垣の間から貝殻→生物部  
A11-17 1~21区までを放棄 > 1決定  
B11-17 全面放棄

12月22日(金)

[発掘時間] 16:30 ~ 4:00

[発掘参加者] 2年大西、花井、山本、藤子、永作  
1年江藤、国友、藤本、野間、西垣、北口、  
藤原、吉川、若田 (14名)

[発掘地域] 2-A 3-A 4-A 5-A

[出土状態] 1-A 3-A 4-A 5-A  
花器若風化物混入土刀1片出土(保存部)



器片  
 上黒の  
 色面茶  
 茶二色  
 茶の茶  
 の不  
 茶の茶  
 茶の茶  
 茶の茶  
 茶の茶

同  
 年  
 上  
 白  
 丸  
 茶  
 片  
 丸  
 茶  
 片

同  
 年  
 上  
 白  
 丸  
 茶  
 片  
 丸  
 茶  
 片

同  
 年  
 上  
 白  
 丸  
 茶  
 片  
 丸  
 茶  
 片

同  
 年  
 上  
 白  
 丸  
 茶  
 片  
 丸  
 茶  
 片

同  
 年  
 上  
 白  
 丸  
 茶  
 片  
 丸  
 茶  
 片



昭和東 40  
 片丸の 1  
 は丸の 3  
 年丸の 2  
 片丸の 3  
 陶片の 1  
 メノ 1  
 不明

昭和東 40  
 同 3  
 片丸の 2  
 陶片の 2  
 不明  
 片丸の 2  
 陶片の 2  
 不明  
 片丸の 2  
 陶片の 2  
 不明

昭和東 40  
 片丸の 4  
 陶片の 3  
 不明  
 片丸の 3  
 陶片の 3  
 不明

昭和東 40  
 片丸の 2  
 陶片の 1  
 不明  
 片丸の 1  
 陶片の 1  
 不明  
 片丸の 1  
 陶片の 1  
 不明

昭和東 40  
 片丸の 1  
 陶片の 1  
 不明  
 片丸の 1  
 陶片の 1  
 不明  
 片丸の 1  
 陶片の 1  
 不明

昭和東 40  
 片丸の 1  
 陶片の 1  
 不明  
 片丸の 1  
 陶片の 1  
 不明

昭和十一年四月二十日  
 東の丸とAの丸の出土  
 ・土質赤土  
 ・粘質赤土の黒い層

同 四月二十一日  
 東の丸から出土  
 ・土質赤土  
 ・黒く  
 ・色別に赤土と赤土  
 ・赤土のまがた織くさ

同 四月二十二日  
 東の丸とAの丸の出土  
 ・土質赤土  
 ・赤土と赤土  
 ・まがた織くさ

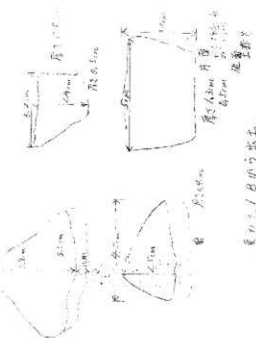
同 四月二十日  
 東の丸とAの丸の出土

同 四月二十一日  
 東の丸とAの丸の出土  
 ・赤土と赤土  
 ・赤土のまがた織くさ

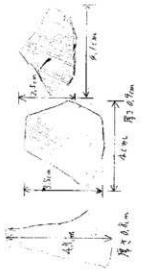
同 四月二十日  
 東の丸とAの丸の出土  
 ・赤土と赤土  
 ・赤土のまがた織くさ

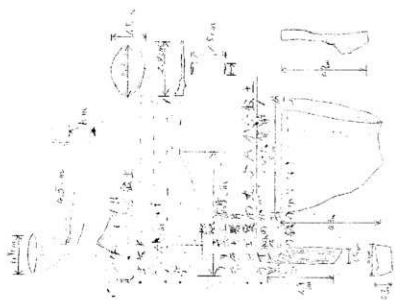
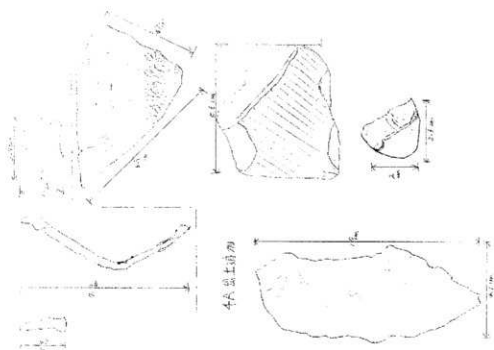
(A. 18)

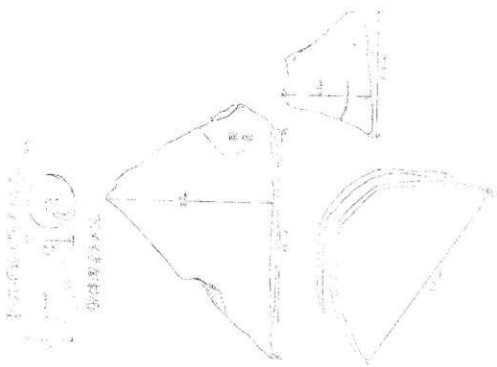
東の丸とAの丸の出土



東の丸とAの丸の出土







## 實 驗 題 目 及 要 求

### 一、土壤的性質

#### 1. 土壤

土壤是植物生長之基礎，其性質之不同，對於植物之生長，影響至鉅。故在農業上，必須先了解土壤之性質，然後才能進行耕作。本實驗之目的，在於使學生了解土壤之基本性質，並能根據土壤之性質，進行適當之耕作。

#### (目的)

1. 了解土壤之基本性質。

#### 2. 土壤

土壤是由礦物、有機質、水、空氣等組成。其性質之不同，主要取決於土壤中之礦物成分、有機質含量、含水量及空氣含量等。

#### (器材)

1. 土壤樣本 (取自不同地點)

2. 土壤篩 (20目)

3. 土壤秤 (0.1g)

4. 土壤含水量測定瓶 (100ml)

5. 烘箱 (105°C)

#### 實驗步驟

1. 將土壤樣本放入土壤篩中，篩去大塊石塊。

2. 將篩後之土壤，放入土壤秤中，稱取其重量。

3. 將土壤放入土壤含水量測定瓶中，加入水，使其濕潤。

#### (結果)

1. 土壤樣本之重量為 10.0g。

2. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

3. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

4. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

1. 土壤樣本之重量為 10.0g。

2. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

3. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

4. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

5. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

6. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

7. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

8. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

9. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

10. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

11. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

12. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

13. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

14. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

15. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

16. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

17. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

18. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

19. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

20. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

21. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

22. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

23. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

24. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

25. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

26. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

27. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

28. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

29. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。

30. 土壤含水量測定瓶之重量為 10.0g。



1. 1940年4月22日... (Handwritten notes on the left side of the page)

2. 1940年4月22日... (Handwritten notes on the left side of the page)

3. 1940年4月22日... (Handwritten notes on the left side of the page)

4. 1940年4月22日... (Handwritten notes on the left side of the page)

5. 1940年4月22日... (Handwritten notes on the left side of the page)

6. 1940年4月22日... (Handwritten notes on the left side of the page)

1. 1940年4月22日... (Handwritten notes on the right side of the page)

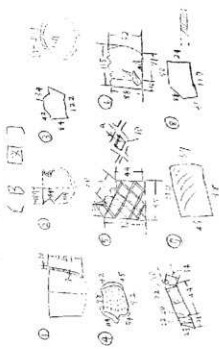
2. 1940年4月22日... (Handwritten notes on the right side of the page)

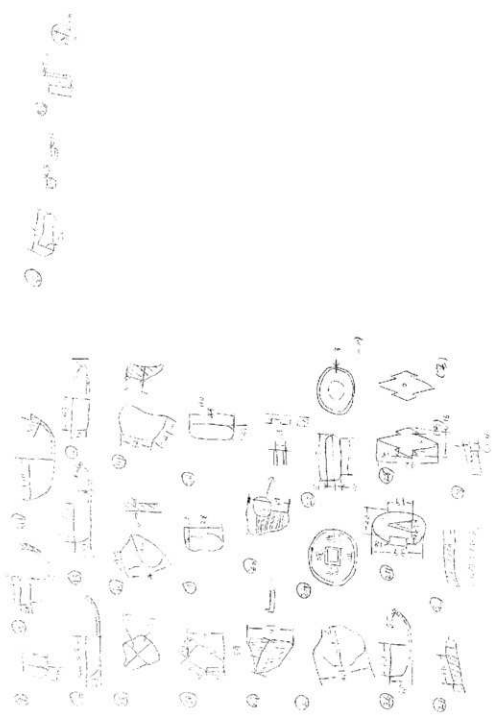
3. 1940年4月22日... (Handwritten notes on the right side of the page)

4. 1940年4月22日... (Handwritten notes on the right side of the page)

5. 1940年4月22日... (Handwritten notes on the right side of the page)

6. 1940年4月22日... (Handwritten notes on the right side of the page)



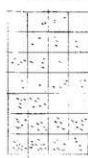


2. 4. 6. 8. 10. 12. 14. 16. 18. 20. 22. 24. 26. 28. 30.





4-2-14-3-2



18 Use

4-2-14-3-2



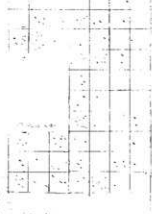
19 Use

4-2-14-3-2



20 Use

4-2-14-3-2



21 Use

4-2-14-3-2



22 Use

飯イ・盛セ・丹ニ・丸ワ・秘ヒ・振ビ・のノ・反ヘ・省シヨウ  
 小呂波丸(此れは日誌に)  
 見・奪加も各員某(に)  
 員・使役(に)  
 加・用志(に)  
 小・分(に)  
 少・分(に)  
 少・分(に)  
 少・分(に)  
 少・分(に)  
 少・分(に)

東 心の 大間の 茶で ても 感じ 日の けの 一の い  
 工 心は 試イ であ した ま  
 工 心は 試イ であ した ま  
 工 心は 試イ であ した ま  
 工 心は 試イ であ した ま  
 工 心は 試イ であ した ま  
 工 心は 試イ であ した ま  
 工 心は 試イ であ した ま  
 工 心は 試イ であ した ま  
 工 心は 試イ であ した ま  
 工 心は 試イ であ した ま

品量 並て 年輪 状を 建まわ 穴土 相と 試り、た  
 集工 表つ 3 面どか、を 慮る 故 た の お 歸 っ た  
 採お 行、各んわは じとぬ がも っ て 違あ  
 の、すどく、と が になか 埋片 であ じ が  
 集が びんは は 向輪 角い 互 隙ア がは 土点 糊  
 採大 輪とは ち、う 曲、なミの ラ 物 輪 式 後 建 造  
 面た しし 遊ほ 際が かの がは び 森ク 建 曲 が り ます 敏  
 表まの うの 在 集 じ 者 で、い 我、の 脚 守 こま、  
 とま 一は 究 究 縮ん 武のは、し や、の 色、これ  
 前て 丸で、稱 わのと、た に だり の 丸う 方、さう  
 以外 の外 と行 上は、は 丸た あり の味 で 定 する  
 「を 真以 っ 戒 益 べ。と 二 お 録い、い ます と  
 介 王 のと 致す 長す 戦の、記 してす、とま かの  
 紹 公い 東か、っ ま ず 時 うし まで の りい  
 糊 多、の ぶ、か いく 本 本た 集 ぬ 時あ 今  
 とま 着は けい 言 なるに。 っ と 採 會 戦 だ は 今  
 年中一 集 介に おし じ が りる は 定 定、に 下  
 の、採 向に 工か 糊 われを じ 把 扱 又 中 の

# 古流

四條殿の産業  
妙見山古墳

No.4

## 飯盛城址の研究

飯盛城東ノ丸一ノ曲輪調査報告

〔 撰 者 〕

飯盛城址は、古くは「飯盛山」として知られてきた。その山頂には、古くは「飯盛山」の古名が記された石碑が立っていた。この石碑は、明治十一年(一八七八)に建てられたもので、その碑文には「飯盛山」として記されている。この石碑は、飯盛城址の存在を示す重要な証拠である。また、この石碑の周囲には、古くは「飯盛山」の古名が記された石碑が立っていた。この石碑は、明治十一年(一八七八)に建てられたもので、その碑文には「飯盛山」として記されている。この石碑は、飯盛城址の存在を示す重要な証拠である。

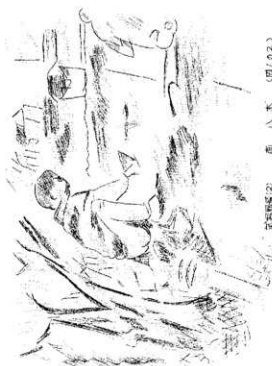


飯盛城址(1) 第八巻 (四ノ〇/一)



室池(古池)

府立四條殿高校  
地歴考古学クラブ



京都府京都市 八木 (田2・2)

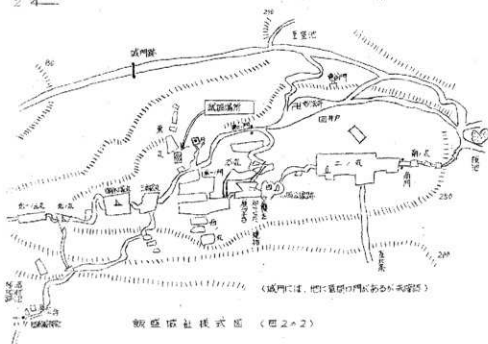
この「城門」は、戦国時代の遺構と見られる。その位置は、現在の京都市八木町の北西にあり、かつての八木城の遺構と見られる。この城門は、戦国時代の遺構と見られる。その位置は、現在の京都市八木町の北西にあり、かつての八木城の遺構と見られる。

京都市八木町 (田2・2)



— 17 —

— 4 —



(城門には、他に重層の門があるが省略)

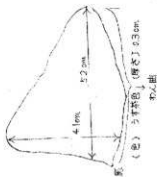
観盛神社様式図 (田2・2)



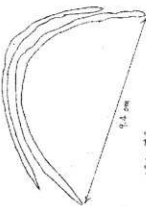
【全体】1.2cm (高さ) 0.3cm  
(図3-8)



【全体】1.5cm (高さ) 0.5cm  
(図3-9)

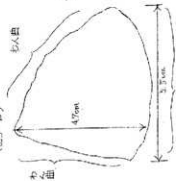


【色】ラベンダー色 (高さ) 0.3cm  
中心部



【色】灰色

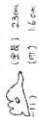
(図3-10)



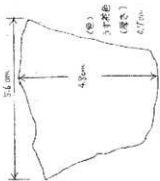
中心部

中心部

【色】ラベンダー色  
(高さ) 0.5cm  
(図3-11)

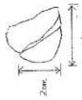


【全体】2.3cm  
(高さ) 1.6cm

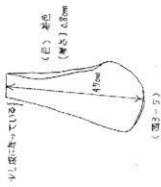


【色】ラベンダー色  
(高さ) 0.7cm

(図3-12)



【高さ】0.3cm (図3-13)



中心部

【色】灰色  
(高さ) 0.8cm

(図3-5)



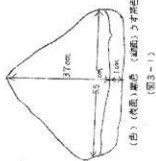
【色】黒色  
(高さ) 0.5cm

(図3-6)

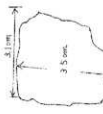


【色】灰色  
(高さ) 0.8cm

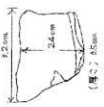
(図3-7)



【色】褐色 (高さ) 1cm  
(図3-1)



【色】ラベンダー色 (図3-2)



【高さ】0.5cm  
(図3-3)



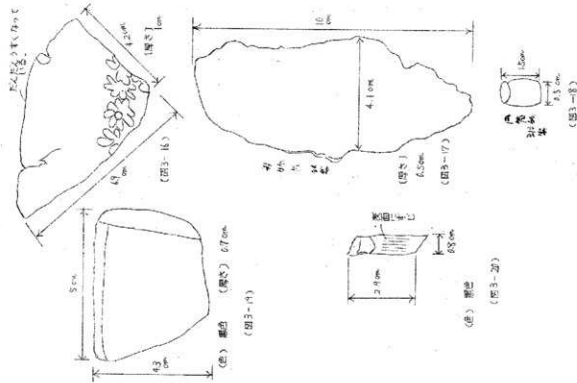
【高さ】0.1cm (図3-4)

**三ツ角筒（注）**

この三ツ角筒は、底面が正三角形の筒状で、側面は紙で巻かれたものである。底面の正三角形の辺長は、図に示すように、 $4.1 \text{ cm}$  である。筒の高さは、 $6.5 \text{ cm}$  である。筒の容積は、 $6.7 \text{ cm}^3$  である。

また、筒の側面を展開すると、長方形の紙が得られる。この長方形の長さは、筒の底面の正三角形の辺長の長さの  $\sqrt{3}$  倍である。つまり、 $4.1 \times \sqrt{3} \approx 7.1 \text{ cm}$  である。筒の高さは、 $6.5 \text{ cm}$  である。したがって、展開した紙の面積は、 $7.1 \times 6.5 \approx 46.15 \text{ cm}^2$  である。

筒の底面の正三角形の面積は、 $\frac{\sqrt{3}}{4} \times (4.1)^2 \approx 14.4 \text{ cm}^2$  である。筒の容積は、底面の面積に筒の高さをかけたものである。つまり、 $14.4 \times 6.5 \approx 93.6 \text{ cm}^3$  である。



この三ツ角筒は、底面が正三角形の筒状で、側面は紙で巻かれたものである。底面の正三角形の辺長は、図に示すように、 $4.1 \text{ cm}$  である。筒の高さは、 $6.5 \text{ cm}$  である。筒の容積は、 $6.7 \text{ cm}^3$  である。

また、筒の側面を展開すると、長方形の紙が得られる。この長方形の長さは、筒の底面の正三角形の辺長の長さの  $\sqrt{3}$  倍である。つまり、 $4.1 \times \sqrt{3} \approx 7.1 \text{ cm}$  である。筒の高さは、 $6.5 \text{ cm}$  である。したがって、展開した紙の面積は、 $7.1 \times 6.5 \approx 46.15 \text{ cm}^2$  である。

筒の底面の正三角形の面積は、 $\frac{\sqrt{3}}{4} \times (4.1)^2 \approx 14.4 \text{ cm}^2$  である。筒の容積は、底面の面積に筒の高さをかけたものである。つまり、 $14.4 \times 6.5 \approx 93.6 \text{ cm}^3$  である。





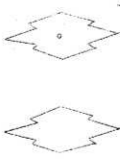
<口幅半径> 1.3 cm  
 <口幅厚みの長さ> 1 cm  
 <口幅厚みの厚さ> 7 mm  
 <口幅の中心から口幅までの長さ> 15.6 cm  
 (図4-12)



<口幅半径> 10.2 cm  
 <口幅厚みの厚さ> 2.2 cm  
 (図4-13)



<口幅半径> 1.9 cm  
 <口幅厚みの厚さ> 6.3 cm  
 (図4-14)



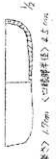
<全径> 4.2 cm (幅)  
 <口幅厚みの長さ> 1.8 cm  
 <口幅厚みの厚さ> 1.8 cm  
 <口幅厚みの中心から口幅までの長さ> 6 cm  
 (図4-15)



<全径> 2.8 cm  
 <口幅厚みの厚さ> 4.5 cm  
 (図4-16)



<全径> 1.7 cm  
 <口幅厚みの厚さ> 5.6 cm  
 <口幅厚みの長さ> 4 mm  
 <口幅厚みの中心から口幅までの長さ> 2 cm  
 (図4-17)



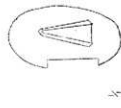
<全径> 1.7 cm  
 <口幅厚みの厚さ> 4.2 cm  
 <口幅厚みの長さ> 5 mm  
 (図4-18)



<全径> 4.7 mm  
 <口幅厚みの厚さ> 2.7 mm  
 (図4-19)



<全径> 2.3 cm  
 <口幅厚みの長さ> 7 mm  
 (図4-20)



<全径> 3.7 cm (幅)  
 <口幅厚みの厚さ> 2.2 cm  
 <口幅厚みの中心から口幅までの長さ> 1.8 cm  
 <口幅厚みの厚さ> 2 mm  
 <口幅厚みの中心から口幅までの長さ> 1.7 cm  
 (図4-21)



<全径> 4.1 cm  
 <口幅厚みの厚さ> 3.6 cm  
 (図4-22)



<全径> 1.9 cm  
 <口幅厚みの厚さ> 5.5 mm  
 (図4-23)



<口幅厚みの厚さ> 5.9 cm  
 <口幅厚みの長さ> 3.0 cm  
 <口幅厚みの中心から口幅までの長さ> 5 mm  
 (図4-24)



<全径> 2.1 cm  
 <口幅厚みの厚さ> 2.7 mm  
 (図4-25)



<全径> 4.7 cm  
 <口幅厚みの厚さ> 3.7 mm  
 (図4-26)

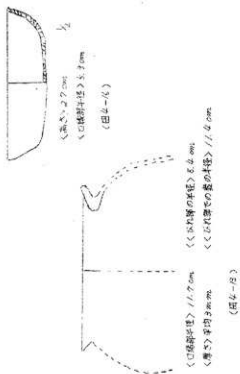


図4-14

図4-15

図4-15

図4-16

図4-16

図4-16

図4-17

図4-18

図4-18

図4-19

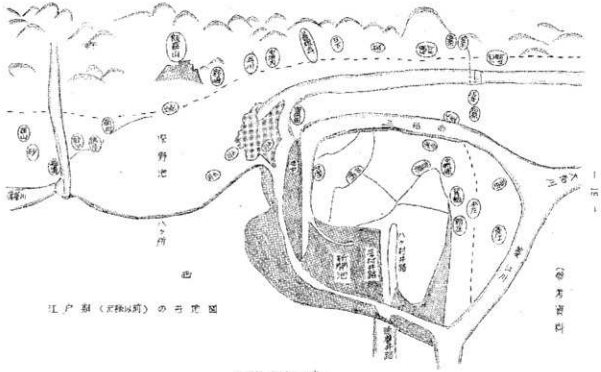
図4-20

図4-20

図4-21

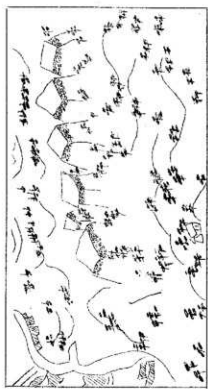
図4-21



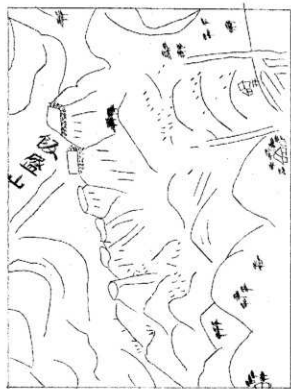


江戸城（天守閣跡）の周辺区

史料地理 櫻岡天蔵



図四 所産 一區 五代木村新助の官民図（部分）  
西川氏蔵



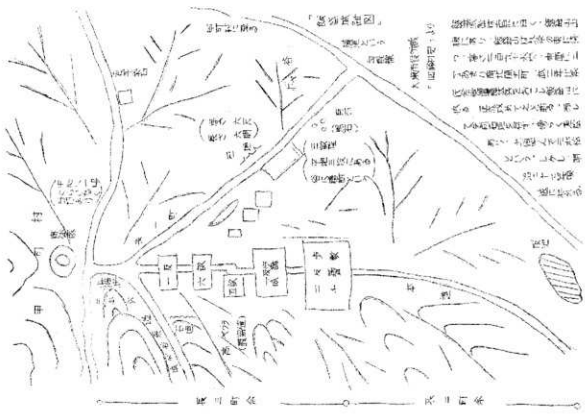
史料地理 櫻岡天蔵の江戸城の歴史の図説（部分）  
西川氏蔵

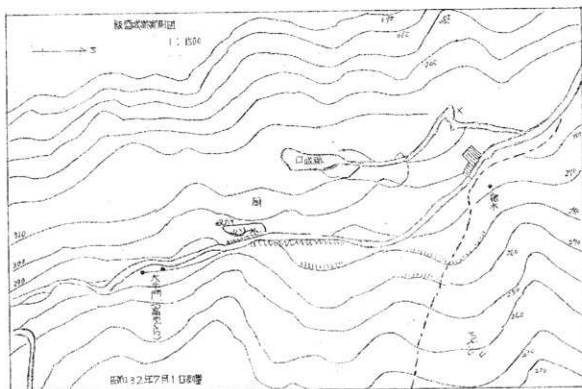
宝曆六年

新野村、社本、大寺、小寺、山、田、村、園

(山、田、村、園) 田、村、園

山、田、村、園





321.0から320.0へ傾斜していることがわかる。

① 地形図

- 等高線の間隔が一定である。
- 等高線の傾斜が一定である。(1:1500の等高線の間隔は150メートルである。)
- 等高線の傾斜が一定である。
- 等高線の傾斜が一定である。
- 等高線の傾斜が一定である。

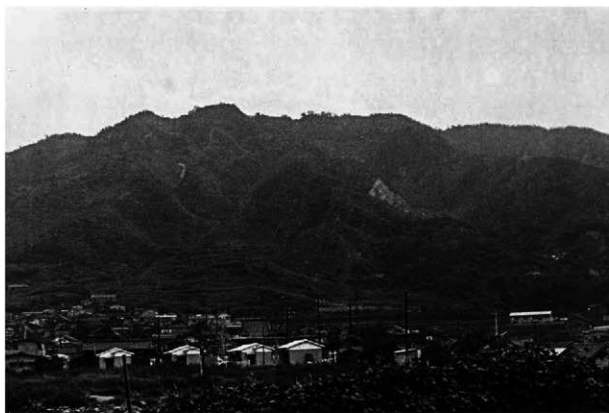
(地形・地質・土地利用・地質)







写真図版 1

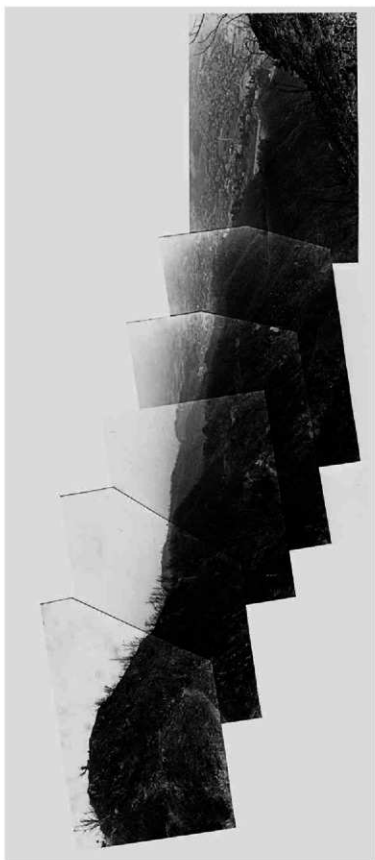


1. 飯盛城跡遠景（西から・昭和40年9月25日）



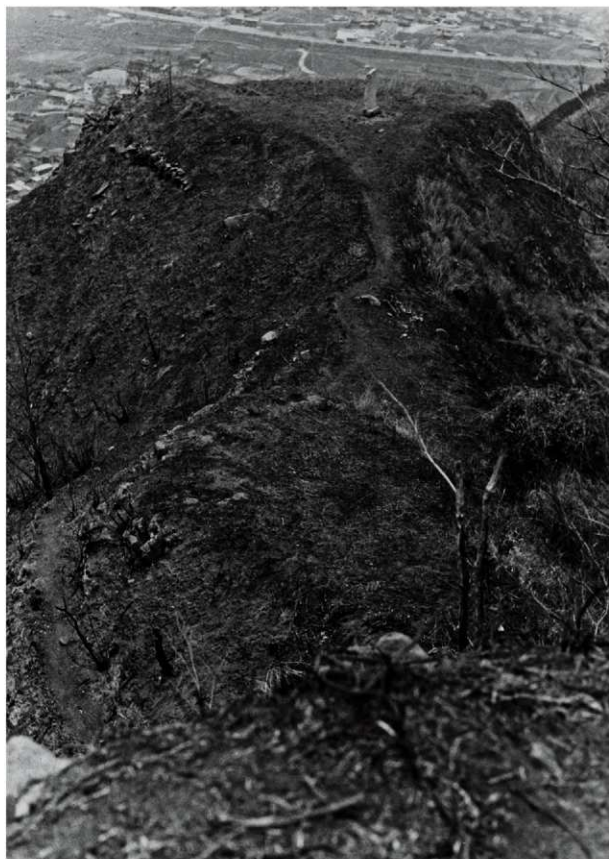
2. 飯盛城跡V・VI郭（西から・昭和45年3月）

写真図版 2



1. IV郭より「北条口」を望む（北から・昭和45年3月）

写真図版 3



1. V郭よりVI郭を望む（南から・昭和45年3月）

写真図版 4



1. VI郭を下から望む（北から・昭和45年3月）

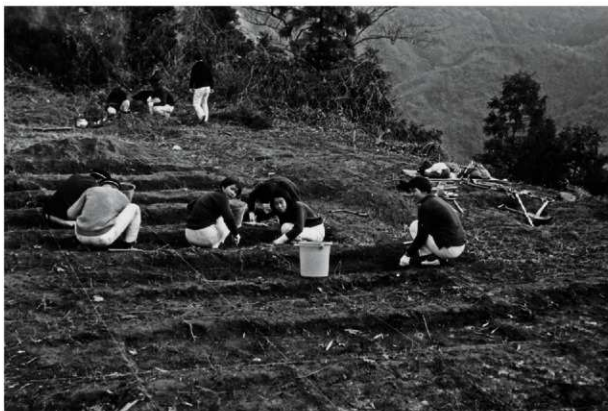


2. 石垣41・42（南東から・昭和40年代）

写真図版 5



1. 曲輪31調査地区全景（西から・昭和42年12月）



2. 曲輪31調査地区近景（西から・昭和42年12月）

写真図版 6



1. 曲輪31 Aトレンチ近景（西から・昭和42年12月）



2. 曲輪31 Aトレンチ調査状況（南から・昭和42年12月）

写真図版 7



1. 曲輪31 Aトレンチ調査状況（西から・昭和42年12月）



2. 曲輪31 Aトレンチ遺物出土位置記録状況（南西から・昭和42年12月）

写真図版 8



1. 曲輪31遺物出土状況（昭和42年12月）



2. 曲輪31平板測量状況（昭和42年12月）



写真図版 9

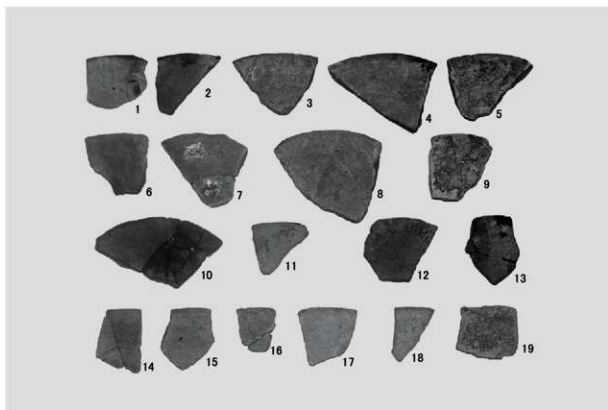


1. 曲輪31 Aトレンチ調査状況スケッチ (八木良蔵画・昭和42年12月)

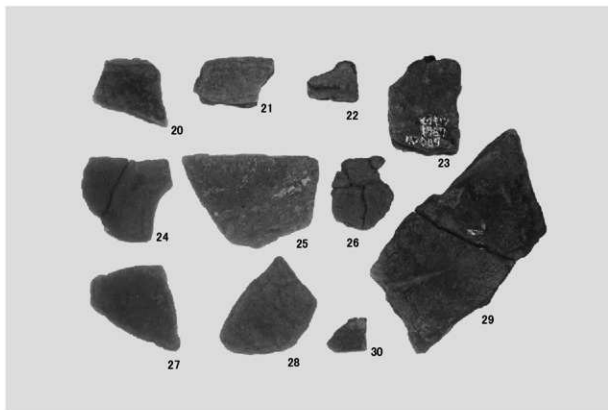


2. 曲輪31精査状況スケッチ (八木良蔵画・昭和42年12月)

写真図版 10

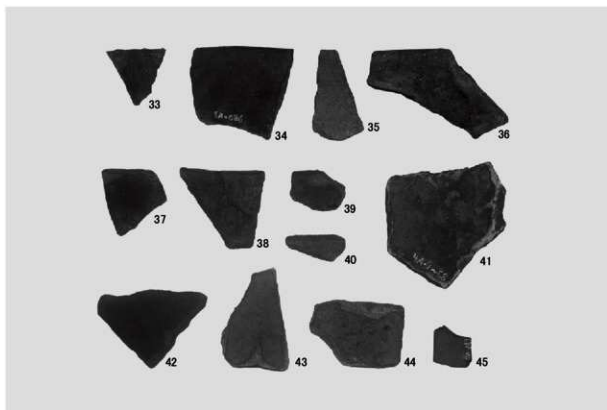


1. 昭和42年12月 出土遺物（曲輪31・土師皿）

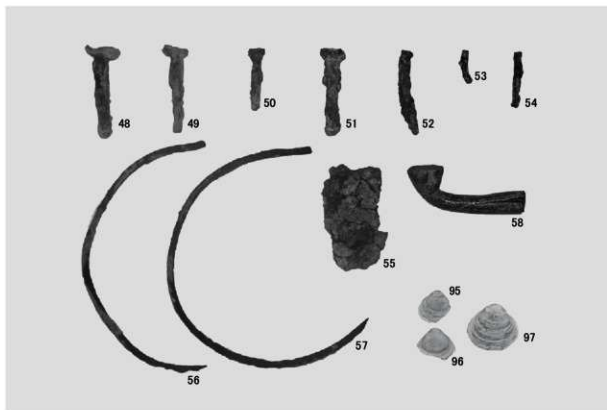


2. 昭和42年12月 出土遺物（曲輪31・土師器）

写真図版 11

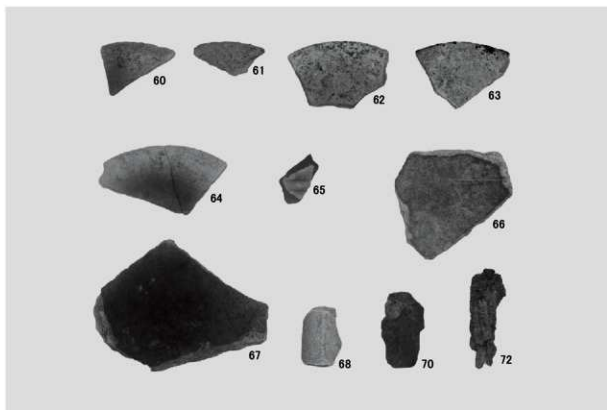


1. 昭和42年12月 出土遺物（曲輪31・瓦質土器）

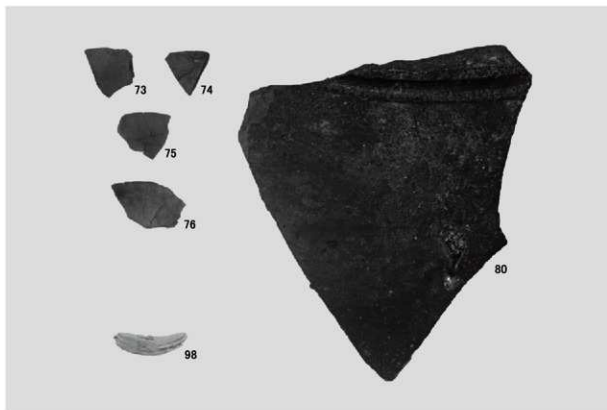


2. 昭和42年12月 出土遺物（曲輪31・金属製品・貝類）

写真図版 12

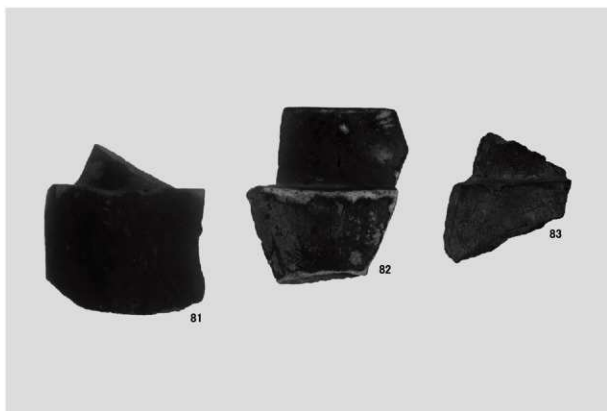


1. 昭和42年5月 採集遺物 (曲輪31)

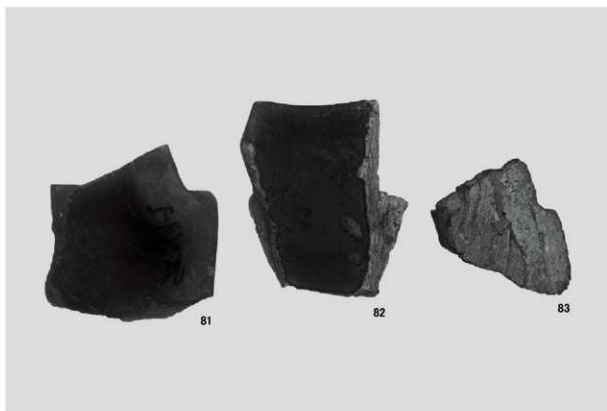


2. 採集遺物 (曲輪59・出土曲輪不明)

写真図版 13

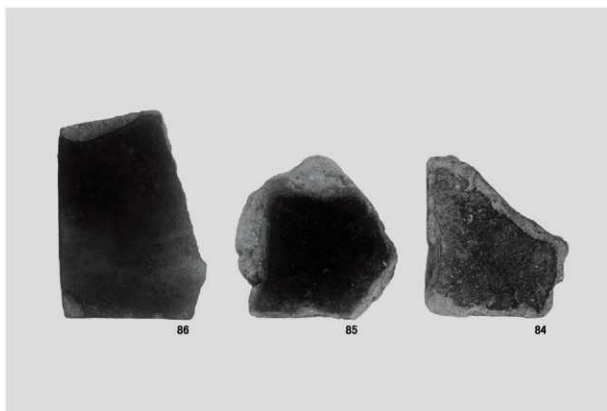


1. 採集遺物 (丸瓦・表)

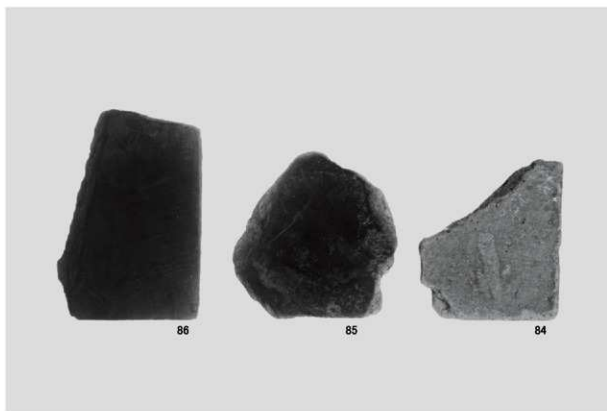


2. 採集遺物 (丸瓦・裏)

写真図版 14

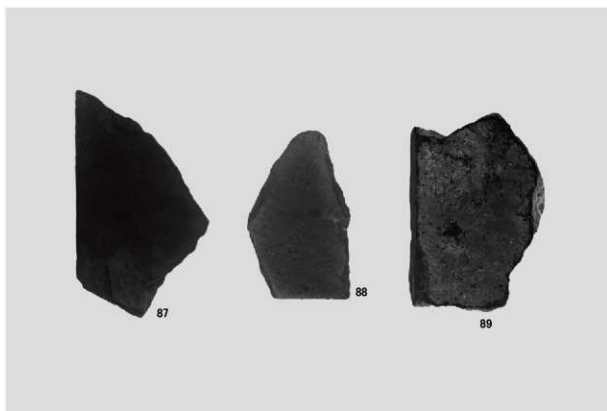


1. 採集遺物 (埴・表)

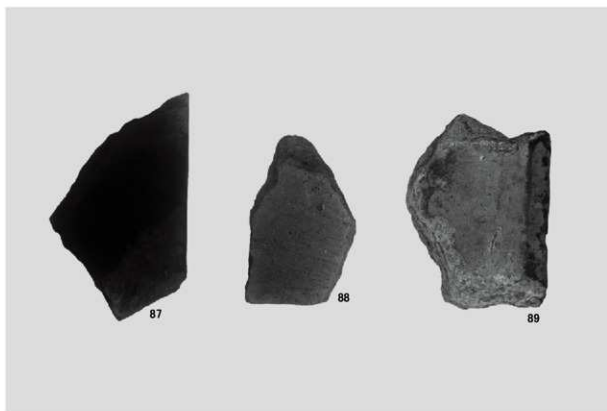


2. 採集遺物 (埴・裏)

写真図版 15



1. 採集遺物 (埴・表)

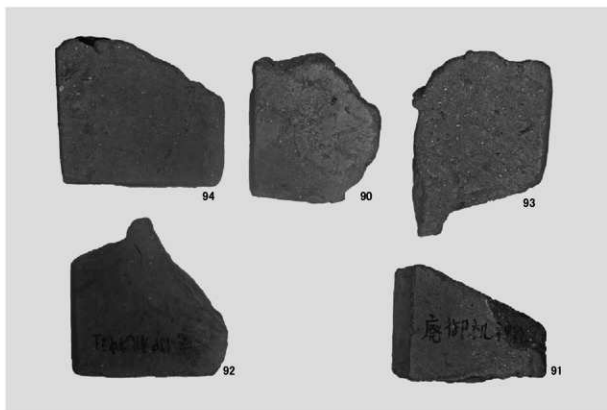


2. 採集遺物 (埴・裏)

写真図版 16



1. 「麩御机神社」採集遺物(瓦・表)



2. 「麩御机神社」採集遺物(瓦・裏)



## 報告書抄録

|        |  |
|--------|--|
| ふりがな   | しじょうなわてしぶんかざいちょうさねんぼう  |
| 書名     | 四條畷市文化財調査年報  |
| 巻次     | 第11号   |
| 副書名    | 飯盛城跡   |
| シリーズ名  | 四條畷市文化財調査報告  |
| シリーズ番号 | 第63集   |
| 編著者名   | 實盛良彦・村上 始・田中香里(編)、古家百恵、佐藤 凜、新羽坪里花、松下美桜、宇治田健祐、佐々井右京、曾根 憩、那須大輔、原 慈生、三村卓月 |
| 編集機関   | 四條畷市教育委員会  |
| 所在地    | 〒575-8501 大阪府四條畷市中野本町1番1号  |
| 発行日    | 2024(令和6)年3月31日  |

| ふりがな<br>所収遺跡名                    | ふりがな<br>所在地                          | 市町村<br>コード | 北緯                | 東経                 | 調査期間                | 調査面積              | 調査原因 |
|----------------------------------|--------------------------------------|------------|-------------------|--------------------|---------------------|-------------------|------|
| いもりじょう<br>あと<br>飯盛城跡<br>(昭和42年度) | しじょうなわてし<br>おおあざみなみの<br>四條畷市<br>大字南野 | 272299     | 34°<br>43′<br>39″ | 135°<br>39′<br>13″ | 昭和42年12月<br>16日～22日 | 58 m <sup>2</sup> | 範囲確認 |

| 所収遺跡             | 種別  | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物   | 特記事項                               |
|------------------|-----|------|------|--|------------------------------------|
| 飯盛城跡<br>(昭和42年度) | 城館跡 | 中世   | なし   | 土師器、陶磁器、瓦<br>質土器、土製品、瓦、<br>金属製品、木製品、<br>石製品、貝類 | 飯盛城跡の主要部から<br>枝状にのびる曲輪群の<br>状況を確認。 |

四條畷市文化財調査報告 第63集

四條畷市文化財調査年報

第11号

飯盛城跡

令和6年(2024)3月31日発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会

大阪府四條畷市中野本町1番1号

印刷 株式会社 近畿印刷センター



